
アメリカかぶれ L A に渡る

蒔田 龍人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメリカかぶれLAに渡る

【Nコード】

N7907C

【作者名】

蒔田 龍人

【あらすじ】

英語も喋れないくせに夢にまでみたアメリカ生活に憧れて32歳で渡米、コーヒーもろくに頼めない現在もLAに住む「僕」からみた、トホホなアメリカンライフのエッセイです。

出会い。

皆さん、今までの人生で何かに憧れたことって一度はお持ちでしょ？
僕の場合、その「憧れ」っていうのが、漠然と「アメリカ」だったんですねえ。

幼少の時代からテレビ番組なんかで慣れ親み、雑誌「ポパイ」なんかでライフスタイルみたいなもんを紹介してもらっていたこともあるんでしようが、それを駄目押し、問答無用、決定的にしたのが、「フィフティーズファッション」。

そうなんです、僕くらいの年代（1960年代生まれ）の方でしたらご存知のはず、空前の「竹の子族」「ロックンローラー族」「ツッパリなめ猫アラレちゃん」大ブーム時代。

そのブームが絶頂期となるチョット前の1978年、札幌に暮らす当時14歳の僕は、やたらデカイ体格に角刈りヘアで「JUN」とか「DOMON」なんぞが胸に大きくプリントしてあるTシャツの袖を肩までロールアップさせて、思いつきブランド宣伝をしながらイキガッておりました、エヘン。

中でも黒地にシルバーやゴールドのブランド名がプリントされたものは、「よそ行き用」として大切に扱われ、ロールアップした袖も無造作ではなく、キチンと丁寧に折り上げられ、決してシワなんぞついてはいけないアイテムだったくらいなのでした。

だがしかーし、当時ツルんでいた、現在はもうこの世に存在していないヨゴレ友人に連れて行かれたブティックが相当にぶっ飛んでいて、一撃で僕のハートを射抜いてしまったのですねえー、これが。なんせ札幌中心街から外れたところに、いきなりスカイブルー（カッコイイ言い方だ）にペンキで塗ったくられた一戸建ての四角い建物が登場して、おまけにアナタ、ドアを開けると店内は一面ピンクな

んっすよ！男もんの店じゃないみたいなんだけど、ピンクの壁に古着の革ジャンがズラァーっと吊るしてあって、なんともアメリカチックな（本物見たことなかったからそう思ったただけけど）手書きのデッカイ看板がモディファイされて、床なんか白と黒の市松模様のピータイルが敷き詰められてるし、フェニックスの観葉植物があちこちにあって天井には扇風機が回ってるし物凄くアメリカアメリカしてて、おまけに駄目押しでスタッフみんなテッカテカのリーゼント、しかも襟足が刈り上がっているではありませんかぁ！「リーゼントⅡ（イコール）不良Ⅱ（イコール）アウトローⅡ（イコール）決して刈り上げたりはしませんぜい」という定義なんじゃなかったのお？！

その上、テロンとした淡い色彩のアロハにホワイトなパンツ、ホワイトな革シューズで涼しげにキメてる人なんかもいて、まったくオシャレで困ってしまう店の真ん中で、角刈り頭にブランド名宣伝しまくりブラックTシャツの袖を丁寧に肩まで織り上げ、ボンタンジーンズ（エドウィン製）にカカトをつぶしたエナメルシューズで暑苦しくキメた、まったくダサくて困ってしまう僕は物凄くショックを受けて呆然とした後ハッと我に返ってあまりにも軸がズレている自分のスタイルから恥ずかしさゆえ来店2秒で即効逃げ帰ったのでした。

その一週間後、今度はそのブティックに負けてはならぬと、真っ白Tシャツ（BVD製）に「トロイブロス社」製の紺色スイングトップ（パイプのワンポイント刺繍つき）の襟を直角に立て、ボンタンジーンズ（エドウィン製）に、なぜか当時駆け出し中のNIKE社製ハイカットバッシュという、今考えるとまったくトホホなスタイルで、鼻息も荒くりベンジを挑んだのでした。

そしていよいよスカイブルーの一戸建て店舗につき、燃えたぎる気持ちを抑えながら「ギイー」っとドアを開けると、途端にピンクの

店内から「あー、いらっしやい、どーもこの間ではあー！」っと、素敵なスタッフのお兄さんからとってもとっても優しく親切な対応をうけて、カッペまるだしのイキがり小僧だった僕の心を一瞬にして素直に開かせてくれたのです。

だがしかーししかーし、実はこれ、「テ」だったんっすよねえー。イイヒトになりきったスタッフが、まだチンチンの毛も生え揃っていないニキビズラ角刈り青二才をその気にさせて買わせるにいいだけ商品を買わせちゃおうという販売促進手段だったんですなあー、これが。

そんな腹とは爪の先にも思ってやしない小僧の僕は買いましたよ、思いつきし。

そのブティック、温泉ホテルみたいなもんで、洋服だけじゃなくそこ一軒で全てのアイテムがまかなっちゃう。

クシから財布、ポマードに指輪、バスタオルや枕カバーまで売っちゃってるから、このブティックの商品だけで一生を送れるといっても過言ではないんだぞ、そこのお方。

そのブティックのスタイルそのまんまが僕にとって「アメリカ」だったわけで、ある意味僕の頭の中に浮かぶ「アメリカ」は、そのブティックそのまんまとなっていたのでした。

テクノポリス。

こうして、なんともいえない独創的な発想をもったブティックから単純に物凄い影響を受け、もちろん刈り上げリーゼントにホワイトな革シューズを履きこなし、なんともいえない独創的なアメリカンカルチャーを勝手に妄想しながら育っていった僕は、やがて妄想ではなく「本当のアメリカっつーものとはいかなるものかーっ？」を探し始めると同時に、同じ脳ミソを持ってると思しき人間たちをカキ集めてグループつくって「ブルースブラザーズ」とか「アニマルハウス」とか「ポーキーズ」なんかを映画館に観に行って「みんなアメリカアメリカした生活をしてカッコつけよーぜ！」と、箸も使わず、ホッケも食わず、だけどザンギ（北海道独自の呼び方なんだけど、結局は鳥のから揚げ）だけは許してあげて、音楽なんかも決して歌謡曲なんか聴かないし鼻歌なんか歌ったもんなら即八つ裂きっていう掟までつくってガンバリ抜いた高校生活を送った後、2年間の計画で東京へと移住したのでした。

東京シティは、上京していきなり渋谷を拠点とする友人達（渋谷ジとかチーマーの前身ね）ができてしまったおかげで、当時19歳の僕はまずアメリカレベル以前の問題で非常にヒジョーに、もちろん「上京してきたばかりのカッペが被るカルチャーショック」つっのを真正面から受けてしまっって、「トーキョーって都会なんだわなあ、やっぱ」ってかなり自暴自棄に陥らせてくれたトコで、とにかくモノがなんでもあって、当然ながら見るヒト見るヒト都会的で垢抜けてて芸能人みたいで外人も歩いてて「狸小路」なんかなくて「俺、とんでもないトコ来ちゃったなあー」って、もうアメリカとか語ってる余裕どころか脳ミソにそんな隙間すらも無くなっちゃった状態で呆気にとられてる隙になぜか当時アルバイトしていた自動車ディーラーにそのまんま就職しちゃって、2年の東京生活のはず

が結局延長料金を払うことなく滞在延期となったのでえす。

復活の日。

本当は2年で故郷サッポロに引き上げるつもりだった東京にオーバーステイさせたその就職先自動車ディーラーの社員旅行で「グアム島」に連れて行ってもらった21歳、そーなんですよ奥さん！、上京してすぐ、あまりにもカルチャーギャップがありすぎる東京の印象から、今日まで忘れ去られていた「アメリカアメリカ熱」が、また沸々と沸きあがってきたのですよう！うう…。

底抜けに青い空、テレビでよく目にした紫外線の強さからくる空気感、走ってる車は右側車線、出会うヒト皆アメリカ人、っと思っただらフィリピン人、看板はみな英語、っと思っただら日本語も…。まあ、とにかく海外、しかもアメリカ領域なのですわー！

で、安いパック旅行特有の「行かなくてもいい、不愉快この上ない免税店まわり」をさせられた後、行きましたよ、さっそく、「スーパーマーケット」に。

スーパーのドアを開けた途端、おそろしく涼しい店内に「プーン」と匂うエアコン臭：あゝ、たまらない、ここ、ほんとにアメリカなんだよおゝオツカチャン！みたいな感動なのか、はたまた単純に寒いだけなのか、すでに僕は鳥肌状態。

鳥肌立てながら店内奥へと進んでいくと、当たり前なんだけど、日常品のパッケージがどれもこれもみーんな英語！しかも派手な色使いでカッコイイものばっか！

気が付くと、いつの間にか僕が押してる大きなショッピングカートは「胃薬」やら「洗剤」やら「ピーナッツ」やら「コーンフレーク」やら「歯磨き」やら、しまいいは「お米」やらの日用品でいっぱい。これ絶対全部持って帰れないでしょ？しかも仮に持って帰れたとしても、部屋に置くスペースなんか、ぜんぜん無いでしょ？って頭ん

中で自分を追い込んでしまうような量だったので、レジの前で「アレいらん」「コレいらん」って抜粋したものだけを自分のお土産として買ってきたのだけど、それでも凄い量になってしまっていたんですよねえ、これがまた。

つで、結構デカイはずの僕のボストンバックには入りきらず、結局「胃薬」やら「コーンフレーク」や「米」たちを日本へわざわざ持って帰るためのスーツケースまでゲットする羽目になったんだけど、そこまでもしても魅力的なパッケージには勝てなかった自分に、「カワイイ奴やのおく、オレ」と愛しく思ったと同時に、「やっぱアメリカだわな、ウンウン」との想いがゾンビのように復活してきたお祝いに、帰りの飛行機出発時間まで余裕があったので、アメリカ心満載なはずの僕は「ひやむぎ」をつい気を許して食ってしまい、その水に当たって、日本に戻る飛行時間はトイレに入りっぱなし、成田空港に着いたら着いたで税関でバッグの中を開けられ、スーパーで買った『日用品』の凄さに呆れた口調で罵られたのでした…。

本土上陸。

さて、海外デビューを飾らせていただいたグアム旅行の後、毎年一回づつ社員旅行にいかせてもらって、「サイパン」の次に「ワイハ」といきなりグレードアップした後、さあー！と思ったら、また「グアム」「サイパン」ときて、26歳となった90年、ついに、つつ、ついにいゝ念願のアメリカ本土、ロサンゼルス旅行となったんであります！

前の晩なんか「時差ぼけになるからとにかく寝ちゃあいけんばい」っていう大義名分で「自由ヶ丘」にあったキャバクラ行つてそのネーチャンつれてカラオケ屋行つて、…でイロイロあつて…、とにかく全く寝てない状態で成田空港から飛び立ったのでした。

前夜は完徹（完全徹夜ね）だったおかげで、興奮しているにもかかわらず、機内でビールを飲んだと思ったら即効で爆睡。

つで、貫禄充分のスッチーに食事で起こされて「ビーフォーチキン？」（アメリカの航空会社だったからね）とか聞かれて、たのんだ「ビーフ」を口にカッ込んだらまた即効で爆睡。

つで、アツという間の11時間、我が機が本土上空に差し掛かると、丁度ナイスなタイミングで目を覚ました僕が窓越しにみたアメリカは「あつけえなあゝ…」、これ、ようするに赤土が印象的だったもので、『記念すべきアメリカ本土の第一印象』が「赤い」だったんですねえ。

すると今度は一面に広がる街並みが見えてきて、ハイパー状態の僕はもう機内の窓から写真撮りまくり。

「きたよゝきました、ロサンゼルスうゝ」って。

迫ってくる街並みを見下ろしていると、いきなり着陸。

平べったかったんですねえ、ロスって、実は。

高い建物がほとんどナイ。ホノルルより平面。何じゃこの土地の使い方あ！

「うーん、そこが、ア・メ・リ・カ……うふっ」

なんでも許せるんですよ、いいの、アメリカが好きなんだから。なに？文句ある？

そしてそして、ついに本土の地に足を下ろした瞬間、「これは私にとってほんの小さな一歩だが……あとなんだっけ？」みたいな、感動なのか感想文を書こうとしていたのかわかんない程、感動していたのですよ、これが。

LAXの空港敷地内に聳え立つ、アトミックなデザインのミッドセンチュリーモダァーシ丸出しのレストラン（実はわたくし、あれ管制塔だと思っていたのよ）はテレビで観てた通りだし、

「Welcome to Los Angeles」って英語で書いてあるし、まー、たまげましたわ、まったく。

っで、イミグレーション（入国管理窓口）へ。

なが〜い列を並んで、挙句に僕の番が来たというのに、昼飯なんだか、トイレなんだか、とにかく受付窓口の半分くらいが急に閉まっちゃって、気絶しそうくらい追加時間で待たされちゃって、やっと番が来たと思ったら、なんとも流暢すぎる、まことにネイティブなアクセントのイングリッシュでスピークされたもんだから、待たされ過ぎで意識モウロウとなっていた僕は「パードン？」って苦しまぎれに聞き返してみたはいいものの、大きな声で言い返していただたところで、決して聞こえてないんじゃないやなくて、意味がわかっていないんだから、「パードン？」もねえべよ……って感じなんですけど、とにかくその場合は「パードン？」を使ってしまったために、知ったかぶりの態度でカマすしなくなってしまうって、「イエア、イエア、オー！イエア！」みたいなストコドッコイな答えをしたと記憶してます。ハイ。

そんなこんなで結局2Kgぐらい体重が減り（これダイエットにいかも）ゲッソリとした状態でイミグレをパスすると、プーッと一服。

するとですねえ、なんて言うんでしょ、旨くないんですねえ、これが。

「なぜなぜ？なぜなの？」「それはね、空気が乾燥してるからなのだよ、スギサク」みたいな。

何だかわかんない展開でも僕は気にしていないんだけど、とにかく旨くない。

じゃ、やあーめた。

つつーことで、なんとロサンゼルスはタバコが旨くなくて、滞在中は酒飲んだ後とユニバーサルスタジオのアトラクション後、シックスフラグスの絶叫マシンに乗った後の一服以外は吸わんでよかったんですねー、なんと。

その辺からジワジワと、「あー、俺、アメリカでタバコ吸わんでも生きていけるだわあ、いいかもしれない」って、都合のいい解釈で「俺、もしかしてアメリカあってるかも…」みたいな、自分にとって偉大な、あー偉大な一歩となったのでえーす。

モノホン。

この世に生まれてきて初めて体験したアメリカ本土の印象は、「人間も含めて、全てがズエーンズエン（ゼンゼンのチカラ入ったバージョン）観光客に媚びてない」ってところ。

いままで連れて行っていただいた「サイパン」「グアム」「ワイハ」なんてさ、みーんな観光客がらみで生活してるじゃん？（100パーセントではありません、あしからず）だけどロスに住んでる人たちは、本格的にアメリカで生活しているから（当たり前だけど）観光客なんて「またウザッテエのがゾロゾロいるよ、ったく…」くらいにしか思っていないオーラがボヨンボヨン出てるから、こっちが恐縮してなきやならんってのが、強烈な印象をもったのですよ。

っでね、巡りめぐりました、ロサアーンゼルス。

「うわぁー、本物のHolywoodサイン!」、「キャー、チャイニーズアターのマリリンの手形足ガタァー!」、「きてえきてえサンタあモおニカぁー!（古っ!）」、「ああビバリーヒルズうーゴージャス!」、「ドヘー、セブンイレブン! って日本にもあるし…」みたいな。

いちいち感動してたんですなあ、これがまた。

いいのいいの、だって「アメェーリカ」すきなんだもん、なんか文句あつか?

っで、食事。

雑巾みたいなステーキ食って、水みたいにうすーい、コクもヘツタクレもないビール飲んで…、だけどいいのいいの、だって「アメェーリカ」だもん、「スキツ、チュツ」なんだもん。

っと自分に言い聞かせながら、同じメニューと一緒にオーダーした仲間が一口食った瞬間から、みるみる渋く凍りついた表情に変化していくシーンを横目で見ながら、僕は幸福の絶頂で口を半開きにしながら夕食のひと時を過ごしたのでした。

「ああ、俺、絶対アメリカに合ってる。なんで俺、ニッポン人なんだろ、…神様だったらなんて意地悪…」ぐらいの勘違いを物凄く起こしていて、「俺、死ぬまでに一回住んでやろ、だって人生一回こつきりなんだもーん！」みたいな思いが沸騰してきたんだけど、「ただ現実の社会はそんなヨコシマな出来心だけじゃ受け入れてはくれない」って、僕の両肩に天使と悪魔が「ボンッ！」って煙を出しながら登場したのを鮮明に覚えています。

暗黒街。

「あー、俺って俺ってアメリカン…」みたいな勘違いをバリバリにしながらの夕食をとった後、オノボリ8人がシボレーアストロに乗

アメリカじゃデイナーだべさ

り込んで、天下無敵のHollywoodに繰り出しまして、んで、

「どろんこプロレス」を嫌々見学してきたんだけど、そこでなんと、

パスポートね

僕は「ID」を持ってきてなくて、店のセキュリティに「ID…」

って言われて、「No…」みたいな返事をしたら、「\$50」って

返ってきて、得意技の「パードン？」ってやってたら、先輩が「身

分証明ないんだったら50ドル払えってよ」って通訳してくれて、

「50ドルっすかあ、…はらいます」払いましたよ。50ドル。(

嫌々だったら払うかフツウ、って思ってるでしょ?) 今から考えた

ら、カモネギもいいところ。自慢じゃないっすけど、ここにきて生ま

れてはじめてカツアゲされましたわ、ほんと、シビレタ。

そんなこんなでこの店は非常にイイ思いをさせていただいたんだけど、問題はその帰り。

HollywoodからTorranceって街(ご存知の方なら物凄く遠いの知ってますよね)の宿泊ホテルまで「101フリーウェイ」を南下したあと「110フリーウェイ」に乗り換えて、それをまた南下するんだけど、その「110フリーウェイ」の途中で突然、フリーウェイを降ろされちゃったんです。しかも夜中の1時過ぎ。「えー!なんでえ?」っと思ったら、道路工事中だって。夜中の1時過ぎだぜー!

「あらあー、せっかくいい気分だったのになんですのー?」って、のほほんとしていたら、運転手をしていただいた、ご当地に詳しい先輩が「おおー!やべ、やべえーぞー!ここ、ワッツだああ!」って焦ってて、「何ワッツ?」って電球の明るさかと思ったら、「おまえら、あのよお、ここ、この間、暴動あった中心だぞお!」って。「暴動」とは、あの「ロス暴動」の「暴動」。

そんぞそこの「暴動」とは「暴動」のレベルがちゃうんですわな
あ、これが。「ハイレベル危機百発暴動」こんな時間に、こんな宇
宙最大危険なロケーションの真ん中に平気で降ろしちゃうんだから、
アメリカって鈍感な奴が多いっつーか、ワザと犯罪を起こさせたい
の？っつーか。

「だげどイイの、それでも、許しちゃう。だってアメリカ好きなん
だもーん」何か文句あんのかよ、え？

っでね、一般道に下りてみると、駐車場のあちこちで黒人が屯して
るし、道路は道路で黒人2、3人がトロトロ横断してるし、霧はす
ごいし、このままだと俺たち8人、ここにいる黒人たちにケツ掘ら
れた挙句に銃で撃たれてオツチンじゃうんじゃないか？っっていう恐
怖心が沸いてきて、そうになったらマッポ（オマワリ様）に捕まった
方が安全だろってことで、即爆走、即信号無視。

交通違反に関しては、元暴走族特攻隊長現在先輩上司である運転担
当様が、サウスセントラル地区をぶっちぎっていると「405フリー
ウェイ」の看板を見つけて、「かえるぞお！やろーどもお！」「お
おー！」みたいな、とても素晴らしい頼もしいワンダフルな歴史的
瞬間を迎えて、無事ホテルへ戻ることができたのでした。

みなさんねえ、もしもロス来たら、ワッツはやばいっすよ、ほんと、
ワッツは。

ただどね、これまだ旅行の話ですからね、まだ。

こんなことを経験しているのにもかかわらず、「ああ…なんて刺激
的なんですよ、ここアメリカって…住みたい…」って、もうどうな
ってもいいから何としても一度住んでみたくなってしまったんっす
よ、僕は。

生きた英会話。

そんなこんなでロサンゼルス旅行も一人とて死ぬことなく全員無事に帰国。

実際に地球の裏側で生活している人達を目の当たりにしてしまった僕は、「なんとしても人生で一回ぐらいは住んでみたい病」が体中に転移してしまっていたのだけでも、それに先立って「えいご」がゼンゼン喋れないことに気がついたんっすよねえ。

だってあなた、なんつったって、なんでも「パードン？」だからね。『まあ、俺のことは「ミスターパードン」とでも呼んでくれ、フフ…』なんて言ってる場合じゃなくて、せっかくだけど英会話が無理ならアンタ無理だわ、って半ば諦めムードが足元からドンヨリを漂い始めた丁度その時期、まったくナイスなタイミングで今度は「社員旅行」ではなく「仕事」としてロスに出張となったのですよ、これが。

って、またまたやってきました、ロサンゼルス。

前に来た時と、まあーっとく変わってない青い空、歩いているのはみな外人、相変わらぬの右側車線。思わず「うーん、ただいま」って、「だけどズウズウしいたらありゃしない、まだ2回しか来てないのに」そう心の中で自答しちゃうほど興奮してたんですね、僕は。

だがしかーししかーししかーし、やっぱ英語が出てこんのですわ、エーゴが。

車の仕入れもあるから、査定するときに聞かんきゃならんことが結構あるのに「パードン？」もねえべよおー、って考えると「あ、アイ、すっ、スピーク、いつ、インディアン…」ってな具合になっちゃう。めっちゃくちやナーバス。「んー、…ナーバス」って、知ってる人しかわかんないジジィギャグで自分をリラックスさせてるしか方法がなかったんですな。

でね、実は僕が勤めさせてもらっていた会社はロス支社があつて、その支社長（日本人）に通訳してもらふことになったんですよ。

「支社長、このコルベット、いいんですけど、ここんどこ、ね？ フロントウィンドウのここんどこに飛び石の傷が入ってるでしょ？ だからこのウィンドウガラスの交換って、いくらになるのか聞いてもらえませんか？」

「オーケーオーケー！ だけどオマエさあ、それくらいは話せるようになつとけよ、ったく！」

さすが、ロス在住のロス支社長、こんなレベルは朝飯前なんだなあ、やっぱそれくらいじゃないと住めんのだなあ……。と感心すると同時に落ち込んでいた僕のその前で、

「デイス ウィンドウ ノ チェンジ ハ ハウマッチ ダ？」

って、でかい声で白人に聞いている支社長の言葉が耳に入って、最初は理解できなかったんだけど、よく、よく頭の中でリピートしてみると、「今言ったのって、文法になってんの？ 全部英語だったいま？ いいの？ あんなんで？」って疑問が沸々と沸いてきて、

「あれだったら、俺にも言えるんじゃないかい？」っていう、「自信」っていうよりも「シヨック」の方がデカくって、「おいおい、アメリカ君が向こうから近づいてきたぞコリャ！」って大きな勘違いを勝手にしちゃって、すっかりその気になり始めたのです。

難産。

そんなこんなで結局お勤めさせていただいた輸入車ディーラーには10年勤務させていただいて、円満退社させていただくことになったのだけど、ここにきて、アメリカに移住するのであればビザが必要だということに気がついてしまったんですね、ビザがなければビザウエーバーってやつで3ヶ月しか滞在できない。

しかも運転免許が取れないんですよ、ちゃんと3ヶ月以上滞在できるビザもってないと。

圧倒的車社会のロサンゼルスで車の免許はコーヒーに入れるクリープより、ハンバーグにかけるソースと一緒にくらい大事。

車がないと、どこも行けんばい。ってなるからビザ取んなきゃと焦っても、さあどーするか。

ロスで古着の卸しをしている先輩にスポンサーになってももらえないか頼んでみたんだけど、すでに従業員をサポートしてるから無理。じゃ手っ取り早く（失礼）学生ビザで行っちゃえー！って31歳のオヤジがいまさら留学かよ状態で申し込み。

落ちましたねえー！もの見事！最初は旅行代理店に依頼してダメ。自分で大使館に郵送してダメ。直接赤坂の大使館に出向いてインタビュー（レポーターもマイクもないやつだからね）受けてダメ。だけど直談判は最終手段だから、これ以上テが無いんよ、これが。

って、根性だして通うこと6回。結局最初の計画通りロス在住の先輩にスポンサーになってもらえて、旅行代理店に頼んでから実に計8回目で見事ビザがおりたのでーす！おかげで僕のパスポートにはイミグレーション審査済みのスタンプが7つ。

6つ目のスタンプを押した担当者（白人）なんて、「ここまでスタンプ押されちゃってたら、もう俺も許可できないよ、だって前例がこんなにあるのに、俺んときに通せないでしょ？」って言われて、なんとなく納得してしまっただけど、ここは根性。

だけど、良い子は決して真似しないほうがいいよお。聞くとおころによると、しつこく大使館に出向いたせいで、旅行すら行けなくなっちゃった人もいるんだそう。

ようするにビザウエーバー（3ヶ月の旅ビザ）で行くだけ行って、入国しちゃえばオーバーステイして不法で居ついちゃう可能性を持つてゐるって印象を与えてしまってるからね。

そんなこんなで、なんと一年かかってやっとビザがおりたのでえす。

迷子おじさん。

やっとこさつとこビザが下りて、即効で部屋ん中の物をいっさいがっさい処分して、大切なビデオ（エロじゃないよ）まで間違えて捨てちゃって、つで、やってきましたロサンゼルス！其の参。

アメリカの航空会社で来たものだから、到着ロビーがいったいLAX空港のどのポジションに位置しているのかがわからなくて、迎えに来てもらっているはずの我が先輩の姿も見当たらずウロウロ。アメリカの携帯電話なんて当然まだ持っていないし…。

つでね、勇気を振り絞って聞いてみましたよ、白人のおじさんに。

『ふお、ふおえあああ、あ、あむ、あいい…』

『はあ？ぺらぺえくら？ぺらぺえくら？』まったくの早口で完璧に何を言っているのかわかんない。

…やばい。

何が『やばい』かって、『この空港から果たして外へ出、先輩に無事会うことができるのか？』よりも、『果たしてアメリカに着いた第一日目にして無事にワインをテストしながらゆっくりとディナーを楽しみ、軽くあたたかい羽毛布団で幸せに就寝することができるか？』よりも、『このおじさんに聞いてしまった以上、何を言われているのかもわからん状態で、イッタイどんな方法でこのおじさんに受け答えすればいいの？』のヤバさの方がダントツに勝っている、『とんでもないことをしてしまった…』と、軽率に本場のアメリカンジェントルマンに話しかけてしまった自分を責めたのだけど、いま自分を責めてみたところで一向にこの場が解決する筈もなかったので、腹を決めて答えましたねえ。

百戦錬磨の俺だ！その昔は小さなヤクザの組長にも『いい度胸しとる』と言われたことだってあるんだ！やればできる！やればできる

んだぞっオマエは！さあ！何か言うんだ龍人！

『パードン？』

これかよーっ！おい！

もうちよっと捻れよアンタ！いつもこれで失敗してんだろ？聞こえてないんじゃないくて、理解してねえんだよアンタは！またおんなじ事言ってくるぜえ、この白人オジサン！

って、もう一人の俺（by E・YAZAWA）が怒って怒鳴ってると思っていたら、その白人オジサン、なんと『マイゴ？オジサン？マイゴ？』って、今度は日本語で語りかけてきたのです！

うろたえながら、今後の傾向と対策を「もう一人の俺」と模索してる最中だった僕は、感激してしまった反動で、とっさに『ソウソウ！ワタシ、マイゴオジサン！』って返していたのですよ。果たして何であの白人は『マイゴ』という単語を知ってはいても、『オジサン』まで咄嗟に口から発することができたのか？いまだに謎なんだけど、とにかく『オー、ユー、マイゴオジサン！オーケーオーケー！』って地図出してくれて、『アナタ、イマココ、エグジット、ココ』って指指しながら丁寧に教えてくれたのでした。

これから新たな人生が始まるロサンゼルス空港に到着して、新たな人生の船出となる初めての現地アメリカ人との会話が、『ワタシ、マイゴオジサン』だもん、その場で死のうかと思った。

アメリカンランチスタイル。

さて『迷子おじさん』が無事先輩に保護されて、これからお世話になる先輩のオフィスへと。

「いやあ、いきなり迷子になっちゃって、白人のおじさんに道聞こうと思ったら、俺、英語しゃべれないってことに気がつきましてねえ〜！」なんていうマヌケな話をしながらLAX（ロサンゼルス国際空港）を後にして105号フリーウェイに乗ってすぐ405号フリーウェイに乗り換えたと思ったら、あとはイッタイ何処に向かってどうなっちゃってるのか全くわからないまま、現地時間の午後一時前、着きましたよ、先輩のオフィスに。

日本、特に大都市の場合、ひとつのビルディングの中に沢山のオフィスが入っているのが普通だけど、ロス郊外となると土地が広いから『オフィスモール』形式で、同じ形をした平屋の建物が区分けされた広大な土地にズラァーっといくつも並んで建っているんですね。

つということは、オフィス一つ一つが完全に独立してる、つで駐車スペースも勿論タツプリ。

表玄関と裏玄関もチャンとあって、裏玄関はシャッター式、つまり表側はオフィス、裏側は倉庫となってるデザインなのですよ、これ、非常に便利。

オフィスモールに入り、我がオフィスに隣接する駐車スペースに車を止めて、裏からまず倉庫に入っていくと、最初に出迎えてくれたのは、犬。

尻尾をちぎれんばかりに振りながら、いきなりスッ飛んできて、いきなり体当たりでご挨拶。

先輩の飼っている、アメリカンエスキモーっていうホワイトな犬なんだけれど、目が青い。

1950年代のアメリカ番組『アイラブ ルーシー』の主人公『ルーシー』の旦那の名をパクって『リッキー』って呼ばれてる青い目をした犬がオフィスと一緒に仕事をしている（本当はしていないで寝てるだけなんだけどね）なんざあ、いかにも『アメリカーッ！』って感じで、『ああ！俺って、ほんとにアメリカで生活していくんだなあ…』と実感しながら倉庫を抜けてオフィスに。

スタッフの方々と挨拶して、用意された自分のデスクを見てみると、なにか置いてある。

『ん？やっぱアメリカ式の歓迎はプレゼントからなのか？』

と、近づいてよく見てみると、手の平よりもひと回り大きなプラスチックのボックス…蓋が乗っかっている…。

『はたしてこれって、もしかしたら…』

蓋を開けてみると、僕の目に飛び込んできたものはあー！

カツ丼。

「あつ、あのおー、マキタさん何が好物かわからなかったもんで、昼食は『カツ丼』でいいんじゃないかって、勝手に買ったとききましたあ。6ドル50セントですう」

って、日本人女性スタッフの優しい声。

おいおいっ！せっかくアメリカに着いて、『ああ！俺って、ほんとにアメリカで…』って感激してた矢先に、いきなり『カツ丼』かよおーっ！気を使って買っておいでくれたお気持ちは大変うれしいのだけれど、成田で飛行機乗る前に『しばらく日本食は食べないなあ…』って、『天井』食ってきたばっかなのだよおー！ハルバル海を渡ってきて何で又わざわざ『丼もの』がダブるんだよおー！大方『ハンバーガー』からなんじゃないの？おい？そうなんじゃあないの

？こういう場合？

だけどね、そう思いながらも、日本以上にボリューム満点の『カツ丼』を美味しくいただいてる悲しい性をもった自分がそこにいたのですな。

夢にまで見た我がアメリカンライフ。そのスタートとして最初に口にした記念すべき食いはなんと『カツ丼』だったのです。

ソーシャルセキュリティナンバー。

さて、念願のアメリカで生活していくには、『ソーシャルセキュリティナンバー』なるものを取得せねばなりません。

なにそれ？ なんですが、日本でいうところの『年金保障番号』。

日本と違ってアメリカでは『国民保険』が設定されていないから、この番号が身分証明となるわけなのです。

これが無けりゃ、銀行口座も開けないし、クレジットカードもつくれない。挙句にアメリカでは絶対不可欠の自動車運転免許も取れないのです。

人間として扱われないんですなあ。

っでね、早速行きましたよ、『ソーシャルナンバー』取りに、『カツ丼』食べたあと。

行った先はそのまんま『ソーシャルセキュリティオフィス』。
ここは年金を受け取りにくる窓口があるので、結構混雑してます。

その上、段取りが物凄おろく、悪い。

長い時間待たされてる同じ立場の人達も、いざ自分の番になるとペチャクチャペチャクチャ余計な世間話をはじめて、大渋滞が永遠と続くのです。

だけどいいんだもーん！ これもアメリカだもーん。好きだから我慢しちゃうもーん… なにか文句でもありますの？

大渋滞の中、順番待ちしている途中で『アプリケーションフォーム

（申込書）』を受け取って、さあ、今のうちに書き込んでおこう：あっ！俺、英語わかんなかった！

でもね、ここは根性ですよ、根性。こんなことでイチイチ困っていたら、これからアメリカでは生活していきませんよ！
ってことで、『んー』って唸りながらもヤットコサットコ書き上げて窓口へ。

『はい、これ』って窓口の白人オバサンにフォームを差し出すと、曇った表情しながら内容をチェック。

僕までも表情がドンヨリと曇ってしまいがらオバサンを見つめていると、オバサン、『なんでソーシャルナンバーが欲しいの？』と聞いてきた。

思っても見ない咄嗟とっさの質問。

さあ困った！

もう『パードン？』は使うまいと誓った龍人君は、少々間があいて『ア、ア、ア、アイ・ウ、ウオ、ウオント・トウ・ゲット・ド、ド、ドライバーズライセンスウ』と、自分としては満点以上の得点を差し上げたくなっちゃう返事をしたところ、『オーケー、パスポートみせて』と即効でご返事。

『ん？パスポート？パスポートいるのお？』

持ってきてなかったんですね、パスポート。

考えてみれば、自分の身分証明は今んとこパスポートだけ。それ持っていないだもん、アンタが悪いわ。

一度戻って、やり直し。

前回と違う窓口オバサンに又同じこと聞かれて、同じこと答えて、今度はパスポート見せてビザを確認してもらって『2週間後に自宅に届きますからね』って、無事終了。

しかし、これがまた新たなハプニングの始まりだったんですなあ、これが…。

ミッション・インポッシブル。 其の壱

さてさて、待つこと2週間、来ましたよー！『ソーシャルセキュリティーナンバー』！

もう有頂天。

『おー！なんだか覚えきれない数字が並んじゃってるぞおー！カッコイイー！んー、俺ってアメリカ人になったんだなあ…、あれ？アメリカ人になったの？俺』

って、ただ単にソーシャルナンバーが来ただけなのにアホな感違いを12秒くらいした後、『んな訳ないべさねえ』と我に返りながら『ここから切り取ってね』って書いてある点線から切り離れたカードをマジマジと眺めていると、

『あれれ？名前のスペル、一個間違えてるじゃん』

そーなんです、ファーストネームのトツ始めからスペルが違って印刷されていたのですねえー！

だけどね、いいのいいの、ここアメリカだもん、文句？ぜーんぜえん！なにか？

同じオフィスで働く日系2世のアメリカ人に聞いてみると、

『スペルミス？大丈夫だよ、あんまり気にすることないよ』
とのご返事。

『フーン、大事なことでないのね、スペルミスって』
ということで、スペルミスを全く気にすることなく、さっそく行き
ました『DMV』。

さて『DMV』とは何ぞや?? なんですが、けっして『BCG』でも『ドラえもん・ムーミン・バンパイア騎士』の、無理やり充て付けネームの略でもなくて…えーっとお…あのお…要は、『運転免許取るそこ』を英語にして、その頭文字を3つとった略式ネームなんですよ、これが。(最初のDはドライビングのDだってことは知ってるんだけど…)

そんなこんなで『DMV』にたどり着いてみるとマタマタすごーい行列…。

これ、決してDMVの商売が繁盛しているわけではなくて、『受付がトロい』だけなんですねぇー。

『よくもまあ、ミンナ黙って待ってるよなあ』って感心してたら、黙ってなかった。

ペチャクチャ・ペチャクチャと英語なのかスパニッシュなのか、とにかく皆さんウルサイウルサイ。

ただどね、言葉の意味が分からないから、聞き流せるんですよ〜これが。BGM。

『DMVのBGM』。ん〜、風情がありますなあ〜、って一句浮かびそうになったと思ったら沈みそうになったりと独り遊びしながら待ち続けること約45分、もう『待ち疲れ全開』『待ち疲れの頂点』『子供だったら寝転んで泣きながらダダこねてる』状態となっている真っ最中、来ましたよーっ! ついに僕の番ー!。

『ア、アイ、ウォント、ゲ、ゲット、ドライバーズ、ラ、ライセン
ス』

やりましたねえー! さすがソーシャルセキュリティ番号を持つてただけあって今回は落ち着いたもんです。

すると、『受付の黒人オバサン』が頼杖つきながら何かに指差して
る。

指されたその先に目をやると、そこには『アプリケーションフォー
ム』が…。

しかも、入り口から入ってきた人達が並ばないでダイレクトにサク
サクと持って…。

『え？これ書いてから並ぶの？そーなの？？』

そーなの。『これ書いてから並ぶの』だったんですねー！

『ソーシャルセキュリティオフィス』の場合、同じ並ぶにしても、
並んでいる間にフォームを手渡されて並びながら書き込むっていう、
充実したシステムだったのに、ここ『DMV』はそこまでのサービ
スはしてくれないのです。さすが殿様役所だ『DMV』ってことは。

『あー、もーやだ今日は。…帰ろ』

こうして、運転免許取得大作戦は、すでに1日目にして『ただ並ん
でただけ』で挫折したのでした…。

国際金融取引。

さてさて、『DMV』で散々待たされた挙句、結局なんの進展も無くヘコたれた『根性 ナシオ』は、その余りにも進まない段取りにアメリカンギャップ（かつこいい！）をヒシヒシと味わいながらも、そのままその足で今度は『銀行口座開設』へと向かったのでえーす。

日本滞在中から『市街銀行（直訳）』という、外資系大手銀行に口座を既に持っていて、その銀行は、勿論LAの至る場所にオフィスはあるし、日本で使っているキャッシュカードもそのまま使えて、しかもドルでお金を引き出せちゃう（当然っすよね）んだけど、いかなのが、円↓ドルへの為替手数料が結構高くついちゃうし、入金ができないのですよこれが。預金を引き出すだけの一方通行。

これじゃあ、これから稼ぐお金は、『ダンスや仏壇の引き出し』か、『台所の床あけた壺の中』にしまっとくしか方法がなくなっちゃう。アメリカくんだりまで来て、そんな原始的なお金の保管はイヤったらイヤッ！

しかもですよ！ここアメリカは『小切手』社会。アパートのお家賃や大きな金額の支払いは『小切手』パーソナルチェックを使います。

これは『チェッキング・アカウント』って言って、『小切手専用口座』セービング・アカウントとベッコにあるわけなんですねぇ、これ開設しなくちゃあ『アメリカで生活してるんだぜ…フフ…』って、人に自慢できません。

でもね、これもね、天下の『ソーシャルセキュリティ番号』を持つていなくちゃあ作れないのよ。

すごいぞ！『ソーシャルセキュリティナンバー』くん！

『どーせだったら、かっこいいロケーションの銀行がいいなあ…』
ってことで向かった先は、『市街銀行（直訳）　ハモサビーチ支店』
。

ここねえ、『ハモサ・ビーチ』っていう、サーファーが集まるビーチの『ビーチが目と鼻の先』って場所にドローンとそびえ立つ、まさに『オン・ザ・ビーチ　銀行』なのですよー。

…かっこよすぎだぜ…。

そう現状に酔うだけ酔い優越感に浸るだけ浸りながら、開けましたよドアを、ギイーっと。

するとすると、いきなり正面カウンターから『青い目をした金髪ねーちゃん』のお姿が目飛び込んできたと思ったら、『ハイイ！ペラペエーラ、ペラペエーラ！』とまあ、入り口ドアを開けたままで口を半開きにしたら、この『河童の三平』に早口で話しかけてきたのですなあ。

『…ウーシ…ナニ言ってるかサッパリわからん…』と思いながらも、さすがここはソーシャルセキュリティ番号を取得してしまった龍人君、今までのストコドッコイとは訳が違います。

『キ、キャン、アイ、オープン、えーと、オープン、アカウント？』

すごい！やればできるぞ君はあ！よくできました！

すると、『青い目をした金髪ねーちゃん』、僕の放ったイングリッシュが理解できたのか『ペラペエーラ、ペラペエーラ！』と返してきました。

『…へ？』って、脇の下に冷たい汗が流れているのを感じながら、焦点の合わない目をパチパチして硬直していると、奥からスーツ着たお兄さんがニッコニコしながらご登場。

手を差し伸ばしてきたので『ハア?』と握手してあげると、『はばすいー、はばすいー』って言うてくる。

『あ!これって、「座れ座れ」って言うてるんじゃない?』と、相手の英語を理解できた自分に感激しながら、偉そうにドッカと座り、偉そうに足を組んで待つてると、

『きゃない、しいー、ようわ、あいでいー?』と聞いてきたのです。

『…ア、アイディ?…オーヤアーオーヤア〜!』

もう完全にアメリカ人だわ俺ったら、受け答え凄いもん、カア〜! (自分に酔ってる時の表現)

心の中で電柱に登るだけ登りながら、スパッと格好よく財布を取り出し、見せましたねー、まるで『黄門様の印籠』のように『ソーシヤルセキュリティーナンバーカード』を!

すると、『のー!みーんず、パスポート(ここだけハッキリ聞き取れた)!』ってスーツのお兄さん。

あれれ?ソーシヤルセキュリティー番号が『ID』になるんでないのかい??

てっきりそう思っていた『河童の三平』は、その場で石像となってしまったのでした。

アメリカってところは、『ピクチャーID』といって、写真付きじゃなけりゃIDとして認めてないのです。日本みたいに『国民健康保険』ではIDになんないんですねえー。

結局この日、『運転免許』どころか、『銀行口座開設』も出来ぬまま、まったくの手ぶらで帰宅したとき。

米国外食産業。

そんなこんなで、ソーシャルセキュリティ番号を手にしたぐらいで未だに何も進展していない状態の中、自分のヒョットコ加減にイラだち始めた僕のオーラを感じ取ってくれたのか、仕事先のスタツフ皆さんが、週末に『ウエルカム・夕食会』を催してくれることになったのですよこれがまた。

…ウレシ恥ずかし…。

『マキタさんは、どんな系統のレストランが希望ですか？』

『え？…うーんと、アメエーリカアメエーリカしたところだったら何でもいいですよ、何せまだナニがなんだかわかんないもんで…』

なんていう謙虚さ…ではなくて、なんつー無知加減さ…アメリカ好きなんだったら調べとけよそれぐらいって感じの返答。

『んじゃあ、スポーツ・バーみたいな感じでもいいですか？』

『いいよ！いい！行きましよ行きましよスポーツ・バー！わあー、なに食べようかなあー！』

って、カップペ丸出しで浮き足立ちながら仕事を終えた金曜日の夕方、お酒が飲めない人の運転で、社用のアストロバン（ワンボックスね）に乗り合わせた皆が向かった先は、『ハモサ・ビュチィ！』

『ん？』って気付いたそのアナタ！さっすがですねえー！そうですね、僕が口座開こうと訪れた『市街銀行（直訳）』のある因縁のビーチに、再び又やってきたのです！

日本では余り見かけしないシチュエーションだと思うのですが、ビ

ーチ、いわゆる『砂浜』と細いサイクリングロード一本隔てただけで、いきなり『繁華街』が隣接している、この『ハモサ・ビーチ』。メインストリートにはバーやレストランが目白押しなんですが、週末とあって、どの店も満員御礼状態。外にまで人が溢れてる。

『…L Aに来て、こんなに人を見たのは、はじめてだなあ…』と、キョロキョロしながら皆に付いて行くと、着いたお店はなんと『お寿司屋さん』ではないですかあゝ！

『…あれれ？スポーツ・バアじゃ無かったの？』
と思いながらも、せっかく連れてきてくれたんだから嬉しそうにしていると、同行してる一人がドアを開けてくれて、『一番最初に入れ』とやってくれてる。

『おっ、んじゃあ、お言葉に甘えて…』と店内に一步足を踏み入れた瞬間、モノ凄い音量でロックが流れてて、おまけに店内は、ましま『スポーツ・バー』！

だけど店の奥には確かに長く伸びる寿司カウンターが…でもって板前さんが何人も並んで寿司握ってる…。

たまげましたねゝ！でね、たまげてる真っ最中に『いらっしやあゝいっ！』とウエイトレスの白人お姉さんがニッコニコしながら日本語で挨拶してきて、またしても『ひょっとこ坊や』は『お地藏さん』と化したまま、ミンナに席へと運ばれていったのでした…。

アメリカンレストランシステム。

さて、思いもよらぬ展開の『お寿司屋さん』を目の当たりにした『お地藏さん』がミンナに運ばれて席に着くと、『いらっしやいい!』の白人ウェイトレスお姉さんからメニューを渡され、『ペラペエーラ、ペラペエーラ?』と、いきなり何か聞いてきなさる。

『…おいおい、今座って今メニュー開いたばかりなのに、もう注文せいつてかよ!』と、少々困惑した表情にかわっていく『お地藏さん』に気が付いたひとりが、『飲み物は何にする?』って聞いているよ』と教えてくれたんですねえ。

そーなんです、いわゆる『とりあえず』は何にしますか?』って聞いてたんですね。お姉さんは。

『あつ、そつかそつかあ、んじゃま、ビールビール!』

ここで皆さんにくれぐれも言つときますが、ビールじゃ通じませんよ、『ビアー』ですからね、『ビアー』。

結局お連れ様が、通じない発音の僕に代わってビールを注文してくれたんですが、『何のビールがいい?』ってことになって、『生!』って答えたら、なんとそのお店、『生』が無かった…。

『んじゃあ、中ビンで!』ってことで注文した…注文していただいた後、メニュー見るより周りのお客を見てることで夢中になると、やってきました中ビン『ビアー』!

お姉さんがテンポ良くトントンとテーブルに置いていきます、そしてそのまま一度引き返しました。…ってアノオ!…コップはあ…コップ置かないで引き返しちゃダメじゃーん! 飲めないジャアーン!

と、悲痛な叫びを心のなかで巡らせていたら、『んじゃあ、マキタ

さんよーこそー！かんぱーい！』って、中ビンそのままでミンナが乾杯をはじめたのです。

『えー！』

そう思いながらも流れに任せて乾杯した後、僕もそのまま口つけてグビッと飲みながら周りを今一度よく見てみると、

『ホントだあ…ミンナそのまま飲んでるう…』

これ、とっても面白かったんだけど、よく考えてみれば、アメリカって昔から小ビンでビールを飲む風習だから、たとえそれが中ビンであろうとも、当然なんの疑問も抱くことなく、そのまま飲んじゃうんですよねえ。

『まあドーズ』『こりゃドーマ』なんて、注いで注がれての習慣が無いお国柄だから、自分の分は自分の分で勝手に飲んじゃうのが当たり前なんです。

モデルのようにお綺麗な淑女が中ビンを直接口につけてグビグビやってる姿なんざあ、江戸っ子としては見ていて気持ちがいいのなんのー！（…あっオレ北海道だった…）

そんなこんなで『なんとかロール』とか『なんとかボート（盛り合わせね）』とか、頼んだものが一通り揃ったところで『いただきまゝす！』。

だがしかーし！、またまた不思議な光景を…。

同じテーブルを囲んでいる仕事仲間でも、僕を含む日本人グループはミンナで『アチコチ摘まむ』のに対し、日系アメリカ人グループは個々に自分の分だけ食べてる…。

『あれれえ？ミンナで摘ままないのお？』って思ってたら、サクサ

ク食べちゃって、もう食べ終わっちゃった人まで出てきた…。

そーなんです！アメリカ人って、周りの空気を読みながら食事するってことを余りしないんですねえ！

それと、見ていて感動したのが、『食事のときは利き手一本だけ、もう一方の手はテーブルの下』っていうのが常識らしくて、皆さん片手だけでお食事しているってこと。

昔はよく『左手は？！』って親から怒られながらゴハンを食べていたんですが、アメリカ人してみると、使っていない方をテーブルに出して食事することは『人から取られまい』とガードしてるように見えるらしいですねえ、使ってもいい手を出して食事することは、『お行儀が悪い』ことらしい。

ナイフとフォークを使う国なのにねえ、…んー、確かにステーキなんかをナイフで切った後は、片手だけで食べてます。…不思議い…。

『お！そんな事で感心したら、ビールが無くなっちゃった！』つつーことで、丁度ナイスなタイミングで通りがかったアジアン系ウエイトレスさんに、『スイマセーン！ビアーおかわりー！』ってやったら、連れの人から、『あの娘は私達の担当じゃないから、オーダーしちゃダメだよ』と警告が…。

…知らなかった…チップの関係上、そのお客そのお客の各担当ウエイトレスがチャントいて、その人に全てをお任せしないとダメなんだ…。龍人君ここでもまた感動。

つつーことで、『？』と『感動』を交互に巡らせながら飲んで食つての時間も終わり、お支払いとなりました。

今回はご馳走していただくことになったのですが、フロアーで奮闘

している担当ウェイトレスのお姉さんを見つけたひとりが、なんやら、ペンを持ってサインしているような動作をお姉さんに送っている…。

これってようするに、『お会計〜!』って、指をバツテンにする行為と一緒になんですネ〜!

アメリカ版『お会計〜!』。

するとそのお姉さん、二つ折りの本皮手帳を持ってきた。

『はいはい、現金の人は? お、ハイハイ、アナタがいくらでアナタがいくら。じゃあ、カードの人はカードかしてえ〜』
と、ひとりが徴収。

結局3枚のクレジットカードを本皮手帳に挟むと、フロアー奮闘お姉さんがそれを又持っていったかと思ったら、又本皮手帳もって帰ってきた…。

『なにやってんだらう? お姉さんたら…』

って考えながらコトの次第を観察したら、カード支払い3人組が、個々に分けられた小さなレシートに、チップ金額を書き入れて、個々の合計金額も書き入れてサインしてる。

『あゝ、ああやってからレジで支払うのねえ〜』と感心したら、

『さあ、いくよー!』って、本皮手帳をテーブルに置いたまま、ミンナが店から出て行くではありませんか!

『おいおい、いいの? あのまんまで? ネエったらあ〜』

と、お地蔵さんはミンナの後を追うように店を出たのですが、これがアメリカでのお会計手順だったんですねえ〜!

ようするに、レジまで行って会計済まさなくていいのだわ。

『ねえ、無銭飲食とかないわけえ? あんなんでえ〜、ねえねえ〜』

と、自分のことで手一杯な筈なのにも関わらず、車中で余計な心配

をしながら帰宅した『お地蔵さん』なのでした…。

本末転倒。

アメリカ、特にここカリフォルニア州では、生きていくために『くるま』は不可欠。

つーことは、『運転メンキョ』も不可欠。

そんなに大事なものののに、アメリカ来たばかりでイキナリくれる訳ないんだから、しばらくの間は独りで生活するの無理じゃん。

って考えていらっしゃる方は今現在ダーレも居ないと思うのですねえ、そうです！皆さんご存知の通り、『国際メンキョ』ってのが存在してて、日本で『自動車普通メンキョ』を持ってる人だったら、陸運事務所で簡単に作れちゃう。

でね、御託に漏れずこの僕もチャーント『国際メンキョ』を所持していて、海を泳ぎ回る魚のようにロサンゼルスを縦横無尽に駆け回っていたのですなあ。

だから、本格的『ドライバーズ・ライセンス』は呑気に構えてユツクリやってたんですが…。

やってたんですがあゝ…。

『スポーツバーお寿司屋さん（テンポ悪し）』から確か2日後、アストロバンを運転中に、交差点の信号が黄色から赤になるあたりで、左折（日本でいうとこの右折みたい）に交差点をまたがる感じ）をしたら、向かえっかわにいた『白バイ（アメリカではバイクポリス）』が赤灯まわして追いかけてきた！『信号無視』ってやつですなあゝ！

『ありやりやあゝ！やべえ、えーっと、こういった場合は両手をハ

ンドルにかけて停まらないと、鉄砲で撃たれるって聞いたから、こはひとつ落ち着いて、こうやって両手を目に付くようにしておいて…』

と、慎重に慎重に路肩に車を停め、心臓の高鳴りを押さえながらバックミラーをチラリと見てみると、鉄砲に手を添えながらズンズンと近付いてきましたよオマワリ様が。

そしてそして、運転席のドア越しまでやってくると、いきなり『ペラペェーラ、ペラペェーラ!』って言ってきたさる…。

『んー、わからん…、おっ!そーだ!、こんなときはコレ言えって、一昨日寿司屋で言われたばかりだった…』

「アイ、アム、サイト、シーン!」

するとオマワリ、『らいせんす』らしきことを言ったので、『オツケーオツケー』と、『国際メンキョ』を出したら、『ノー!でいすいず なつと らいせんす! でいす いず ぱーみつと!』って、『パーミット』と呼ばれた『国際メンキョのつもり』に指差しながらイキリだってる…。

『え?だってコレしか持ってないよー!ダメなのかよ?これ持っても…』

って青くなっていると、また『ペラペェーラ、ペラペェーラ!』って言ってきたので、ソーシャルセキュリティーをゲットして自信がついている龍人君、

『アイ、キャント、アンダースタンド!アイ、キャント、スピーク、イングリッシュウー!』

やった！ついに印籠を掲げたぞ！すごいぞアンタ！

と、スツキリ爽快な気分になっていたら、ユツクリとした口調で、
どーやら『レジストレーションと、インシュランスを見せろ！』つ
て言ってるらしい。

なんだそりゃ？ってことになってダッシュボード開けてみたところで、
どれがなんだか分かんなくてタジろいでいると、『車から降りろ！』
と言ってきた。

しょーがないから車から降りると、『そこへ座れ』って歩道に座ら
せられて茫然としてると、オマワリサン、なんやら無線で話してる。

オマワリサンがチケットに色々書き入れてる最中にレッカー車（ア
メリカではトーイング車と呼ぶ）登場。

あれよあれよと言う間に、今さっきまで僕の乗っていたアストロ君
を繋いだかと思ったら、颯爽と姿を消して行っちゃった！

『あら〜？いったい何が起きたのお〜？』って、本当に茫然として
いた僕にピンクの紙っ切れを渡しながら、『アンタは無免許で、そ
のうえレジストレーションもインシュランスも持っていないから、
今この場で車を押収しましたよーだ。文句があるんだったら裁判所
にくればいいじゃん、ざまあみろ！』みたいな事言ってるオマワリ
サン。

『ホワット、アイ、ドゥーイング？』って、通じてんのか通じてな
いのか分からん言葉が思わず口から飛び出てきたんだけど、『もう
終わったから、ゴーゴー！ここから立ち去れ！』みたいな返事が返
ってきて、その白バイ野郎も『ブイーン！』とアッサリ消えていっ

ちゃいました。

ホント一瞬の電撃行動で、イッタイなにが何だか、なにが起きたのか、まぼろしのようなヒトトキを送ってしまった『ひよっこ坊や』は、本来は信号無視だったはずが無免許運転扱いとなり、ついさっきまで水を得た魚のように動き回っていた車もなくなつて、その場で口を開けっぱなしのまま、唯一残ったピンクの紙切れを握り締め、ただ啞然とキツネに摘ままれていたのです。

どうやら、『国際メンキョ』って皆さんも受け止めていらっしゃるであろう物体は、『免許証』ではなくて、『許可証』らしくて、これだけを持ってもダメらしく、日本の運転免許証も同時に見せなくちゃならなかったらしいのです。日本の運転免許証とセットじやなきや許してくれないんですねえ！

そしてそして、これ大事なんだけど、オマワリに止められたらまず、『レジストレーション（車検証みたいなもの）』と、『インシュランス（任意保険証）』を提示しなければ、その場でレッカー移動されちゃうのです。ちなみにアメリカは『自賠責保険』なるものは存在しないので、個人個人が自力で保険に加入しなければなりませんのよ、じゃないと無保険で運転することになって、その時点で『違反』となる。

『知らぬが仏』の逆番だわホント…。

こうして『ひよっこ坊や』は、『運転メンキョ』を取得する以前から、既にもう『違反チケット』を切られちゃったんです…イッタイこの先どうなることやら…トホホ…。

天国への階段。

果てさて、運転免許取る前から既にもう違反チケット切られてレッカーされちゃった龍人君、

『イッタイ何処に車を取りに行けばいいのдар？…あ、そーだ、まず先輩に自分を拾いに来てもらお…あっ…ココ何処だかわかんなかった…』

ということで、ご厄介になってる先輩宛に掛けた携帯電話（オフィスからの借り物）を持って、目の前にあるハンバーガー屋に入って、定員のお姉さんに『今居る場所はどこなのか』を説明してもらおうと、

『プリーズ、トーク、プリーズ、トーク』

って、不気味なリクエストしたら、物凄く物凄く『いやあゝゝな顔』されたんだけど、いやいや代わってくれた電話の向こうで僕の前輩大先生救助員様が上手く話してくれたみたいで、お姉さん、あっさりと店前の交差している道（道路のひとつひとつに名前が付いているので、ものスゴク便利）を説明してくれちゃったので、お返しにソフトドリンク（飲み放題）を頼んであげて、結局その店でゴクゴクしながら待ってました。

すると、10分で来ちゃった！先輩救助員様。

近かったんですネエゝ！現場があゝ！！

方向音痴なもんで、イッタイ遠いのか近いのかも分かっていなかったのですよ私ったら。

で、早速『ポリス・デパートメント』へ…。

『ポリス・デパートメント』っていつでも、けっして『オマワリサンの品揃え豊富！お得なオマワリサンのデパート』って訳ではありませんぞその方。（ある意味近いといったら近いけど）

そーです！『警察署』へ行きましたよ違反チケット連れて。

大先輩救助員様が『受付』で聞いてみると、

『レッカー車が持ってた場所は分かったけど、今日、日曜日だから引き取れないって、明日だな』

ってことになって、『んじゃま、明日』と。

すると、『受付』に返してもらった『僕が切られたピンクの違反チケット』を改めてヨォーク目を通した大恩師先輩救助員様の顔色がドンドン青ざめていって、『オマエ、信号無視したの？』と。

『すねえ』と答えると、『やっばいぞおー、タツカイ（高いの上级）ぞおー、罰金〜！』

『…えっ、高いの？200ドルくらい？？…』と考えながらビビっていると、『400ドルくらいくるぞ〜！』とおー！！（罰金の請求は、後日改めて郵送してきますです）

『違反』にも二通りあって、『車が動いている時に発生した違反』か『停止中に起こした違反』のどちらかに区別されるんだけど、動いている最中の違反は罰金が極端に高いらしいのです…。

…死んだ…死んだわ俺…。

と思っていたのも束の間、翌日、レッカー会社にアストロ君を引き取りに行ったら、

『ご和算に願いましたはあゝ、トーイング（レッカーね）代、一日半の駐車代の合計でえゝ、』

『合計で？』

『合計でえゝ、275ドルになりますうゝ』

『はいはい、にひやく…、に、にひゃくなじゅうごドルウゝゝ！』

…ご破産…。

…即死…。

…完全犯罪完了…。

結局、免許のない、要は『一般市民デビュー前』の時点で、すでに700ドル弱がフトコロからアポロ11号（古っ！）のように気持ちよく垂直に真っ直ぐスッ飛んで行ったのです…。

恐るべし『レッカー移動』…皆さんもお気を付けあそばせね…。

コロンブスの卵。

僕がロサンゼルスに渡って最初の三ヶ月間は、仕事場の『ボス』であり『個人的先輩』であり『命の恩人火の用心』でもある知人宅に居候させていただいてたんですけど、実はその御家、かつては『エーちゃん』や『セーコちゃん』が住み、『ゴジラ』も居候していたという、山ひとつそのまんまが高級住宅地である『パロスバーデス』という地域にあつてですよ、しかもですよ、その中でもひとときわロケーションの良い、山のテッペンに建っていたんですよー！

スゴイ！はつきり言ってグレート！！

なにがつてグレートって、部屋からロサンゼルス市街の全てが丸見えだもん！

『上から目線』もいいところ！
究極の『上から目線』！！

でね、これまた夜景が凄いのなんのってアナタ！キラッキラ！
つたらキラッキラ！！

『…ああ…クニのカアちゃんに見せてやりたいだっぺえ…』

ロサンゼルスに到着して間もない『イナカッペ大将』は感激していたのでした…。

…と、ここまでだったら、なーんてことないフツの自慢話でチャンチャンなのですが、そこはアナタ、僕がわざわざお伝えするまでも無いよ、って既にお気づきですよネェ。

そーです！そのとおり。

実はこの住宅地、『高級』ですから勿論セキュリティ面もシッカリしてる。

といっても、べつに『万里の長城』みたいな塀が張り巡らされて監視員が銃もって立っているわけでもなくて、落とし穴がアチコチに隠されているわけでもなければ『地雷』が埋め込まれているわけでもない…長嶋元監督もいない…。

じゃあ、イッタイ他にどんな方法あるの？なんですがあー、…実は、『逆に経費を掛けない』のが、立派にセキュリティの役割を果たしているのです…。

知りたいでしょ？ね？ね？

お教えしましょう！

実は…これ『アイディアだなあ…』と感心したんだけど、なんとなんと、『街灯が一切ない』のですねえ…これが！

すなわち、『パロスバーデス地区』中を迷路のように網羅する道路のすべてが、夜になると真っ暗けっけになっちゃうんですなあ。

っということはある、『ジモティー（古っ！）』にしか道がわかんない。

『よそ者』が侵入したら最後、夜が明けるまで二度と帰ることができない『闇の迷路』となってしまうんです！ね、アイディアでしょ？まさに『発想の転換』ってやつですよねえ！。

これじゃあ恐くて部外者はナカナカ入り込もうとは思いませんもん。

でね、ここまできたら皆さんも薄々感づいていらっしやる事と思

ますけどね、ともいう僕もね、居候中、何度も何度も迷子になって、『パロスバーデスから出れない』んじゃなくて、『パロスバーデスの家に帰れない』という、前代未聞の逆パターンに陥っていたのでーす！（って、明るく言うことではありませんね…）

お蔭様で、今でも僕は『パロスバーデス地区』が大っ嫌いでえーす！！

知らぬが仏。

LAの地に足をのせたその直後からナンダカンダとバツタバタ、バツタバタしてたら、アレヨアレヨという間にテキサス州に来てました。

これねえ、洋服の買い付け出張だったんだけど、『古着』の買い付けなもんだから、業界用語で言うところの『ボロ屋』、すなわち、捨てられる寸前の洋服たちが集まったウェアハウスに3日間籠ることになったのです。

業界用語で言うところの『ボロ屋』って、アメリカ中から集まる『ボロ着』を雑巾なんかにしてアフリカや発展途上国にドーンと送っちゃうことで収益をあげてるんだけど、一時日本で勃発した『古着ブーム』で日本人がやってきては雑巾になる運命だった『ボロ着』を大枚叩いて買ってくもんだから、商売根性まる出しの『ボロ屋』たちが、雑巾にする前に日本人バイヤー向けに解放するようになったのです。

物凄く巨大なウェアハウスを、蟻んこサイズの我々バイヤーが場内に立ち込めるホコリ（これがスゴイのナンノ！）にまみれながら、『感染調査員』みたいなゴーグルとマスクして、クシヤミしながら悪戦苦闘しヤットヤット厳選して集めた『ボロ着』をデツカイデツカイ箱に山のように積みこんで担当者に持っていくと、『ハイ、コレ50ドル！』とか、デスクに踏ん反りかえりながらエラソーに一枚一枚値を付けていくんですよコレが。雑巾寸前の『ボロ着』つかまえて。

『オマエさあ、俺たちが見つつけ出さなかったら雑巾になってるんじ

やないのお？これえ。なんで50ドルもすんだよお！』って文句タレると、『要らないならイイよー、他のバイヤーに売っちゃうからあ。』って、自分のデスク裏に積んじゅうの。僕らが鼻水垂らしながらピクアップしてきたお洋服を。エラソーに。

っで、前置きが長くなっちゃったけど、ソナコンナな買い付けをしに、やってきたのはテキサス『エルパソ』！

小さな町なんだけど、メキシコとの国境近くということもあって、お見かけする皆さん非常に元気があって明るい。どれくらい明るいかというと、もう『エルパソっ！』っていうくらい明るい。

『ボロ屋』でムカついても、すぐに忘れさせてくれる陽気な町なんだけど、LAからフェニックス経由のオマケに時差もあるもんで、着いた当日は既に深夜。

だけどアメリカ来たばかりの『カップペの大将』は、興奮してレンタカーで『深夜のドライブ』に出かけたのでした。

『満天の星空』ってアノことを言うんだろうな、ってくらいスゴイ！『流れ星』なんてビュンビュン流れちゃってる。

『願い事を3回となえると叶うよ…』なんてロマンチックなこと言ってた今までの自分が愚かに思えちゃうほどビュンビュン！

『UFOでてこないかなあ？』なんて思いながらドライブしてたら、山脈に大きな星のマークが青々と光ってる。

『…カッコイイ…ダイモンジ焼きとはゼンゼン違う…アメリカだあ…』

って感心しながら平和にホテルに戻り、水みたいにウスーイ『ビール』をゴブゴブ飲んで、爆睡しながら一日目が終わりました…。

そして翌日、目的の『ボロ屋』で案の定ジャージャーと滝のように鼻水を流しながら午前の仕事を終わらせて、昼時に合わせて登場し

たケータリングバスのメニュー見たら、さすが全部『メキシカン』。

『おじさーん、チキンのブリトーちょーだーい！』ってオーダーしたあと、お水飲みながら出来上がりを待っていると、足元に違和感…なんか踏んでる…。

『ナニ踏んでんだろ？』と、足を上げてみたら、そこには、『なんだあ、薬きょうだったのかあ、俺またテツキリ蠍じゃないかと…ん？…薬きょう？？…や、薬きょうおおお！』
ってことで、ワタクシ『ピストル（チャカともいう）撃った後に発生する、薬きょう』を踏んでいたんですね！

しかも、良く見るとアチコチに薬きょうが普通に転がってる…。

薬きょう拾ってマジマジと眺めていたら、『ボロ屋のエラソーおじさん』が寄ってきて『ペラペェ〜ラペラペェ〜ラ』と。すなわち『この辺はねえ、昼間はこんなだけど、夜はスッゴク危険なんだよお〜』らしい。『倉庫街』って、夜になると治安が良くないのは、だいたい全世界共通なんですわえ！。

『あれれ？俺、昨日の晩って、車でドコ流してたんだろ？？…』
と思いながらブリトーをパクパク。

そしてそして、『鼻水肉体労働』も終えた夕方、物凄く綺麗な、燃えるような夕焼けをバックにした山脈が真っ黒に映し出されている中、鼻水肉体労働者は『ああ…昨日みた星印だあ…やっぱキレイだなあ…ってオイ』。

そーです！そーなんですっ！！

つたら、そーなんですよっ!!!

なんとワタクシ、『この辺はねえ、昼間はこんなだけど、夜はスツゴク危険なんだよお』を、調子こいて一人でドライブしていたのでえーす！

こんな『東洋の神秘まる出し』の顔した『かっぺの大將（お、おにぎりが、す、好きなんだなあ）』が、たった一人で、絵に描いたようなレンタカー乗って『この辺はねえ、昼間はこんなだけど、夜はスツゴク危険なんだよお』を夜中に感動しながら流してたのに、いまだにこうしてそのお話しを書いてるなんて、奇跡！ミラクル！ええっと『ミラコォー！』なことだと思っておりますですハイ。

皆さんも、アメリカで地方に行くときがあつたらね、あらかじめ『ジモティー（だから、古っ！）』に色々アドバイスを受けてから行動してくださいねえ。 （体験者は語る）

代償。

皆さんが居酒屋なんかに行って席に着くと、まず小鉢なんか頼んでもいない料理がチョコット入って出てきて、結局『お通し代』として勘定についてたってケース、良くありますよね。

あれって本当は断って払わなくても良いらしいのですが、アメリカの場合、『お通し代』の無いかわりに『チップ』というのを『あくまでも自分の意思で』勘定に加えることは、もう既にご存知のことでしょうー。

いわゆる『ご奉仕代』。

チップの金額設定は『あくまでも自分の意思』なので、幾らでも構わないのですが、なにせ物事には『常識的範囲』ってーものが存在してますんで、この場合、『あくまでも目安として』のパーセンテージが暗黙のルールとして認識されています。

では何パーセントが一応の目安になるか？っつーと、『ランチ15%、ディナー20%』。

ようするに、ランチが5ドルだったとすると、チップは5ドルの15%で75セント、だけど、そこそこは太っ腹ってーところをみせて1ドルが目安。ディナーが20ドルだったら、20ドルの20%で4ドル、ランチディナー共にこの金額以上だったら良いとされます。

でもね、仮にウェイトレスやウェイターの態度が悪くって気に食わなかったら払わずにいても良いのですが、頭に来るのは日本食レス

トラン。

ランチでヒョコッと入った日本食レストランだったんだけど、僕のテーブルを担当したウェイトレスのオバサン（日本人）、態度が非常に良ろしくない。

なんか知らんが、不愉快極まりない態度をお取りになる。

当然、僕のチップは『目安パーセンテージ』よりも遥かに下回る。サッサと食事を済ませ、受け取った伝票にチップを含んだ合計金額を記入し、クレジットカードのサインをして店を出たら、なんとそのオバサン（日本人）、僕がサインした伝票を振り回しながら走ってきた！しかも、働いている時より動きが俊敏だ！速い速い！あっという間に僕の目の前まで瞬間移動して来なすった！そしてそしてワープしてきたかと思ったら、ものすごく険しい表情で、

『お客様、私に何か気に召さないことでもありましたか？』

と聞いてきなさる。

『はあ？』と返すと、『あのお、チップの記入額が少々少ないんですけど』と。

こう見えても（見えてないか）元極悪非道不良少年だった時代のあの龍人君、不愉快な態度でせっかくの『楽しい楽しい憩いのランチタイム』を台無しにされた挙句に、仕事中の動きからは想像できない俊敏なダッシュ力を発揮して『チップのカツアゲ』をしてきたオバサン（日本人）を許すわけにはいきません。

『はい、気に召しませんでした、さよならバイバイ、シッ、シッ！』と、カツアゲババア…失礼…ウェイトレス嬢を追い払わせていただきました。

チップが付いてるだけでも有難いと思いやがれ！です。

原則的には、気に入らない態度を取られれば払う必要のないチップ。しかし、ハワイなんかの観光地では、チップ社会ではない日本人が

あまりにもチップを付け忘れちゃうんで、最初からチップを含んだ合計金額を請求してくるレストランを多くお見かけします。

これって、本当はいけないことなんですよ〜ね。

皆さんがアメリカにお越しの際は、もし、とても気が利いて非常に快適な時間を過ごすことができたウェイトレスやウェイターに当たったら、気前良くチップを置いてあげましょうー！

招かざる客。

世間では一般的に『ピストルの国アメリカ、特にロスアンゼルスは治安が悪くて危ないよ』とチラホラ言われていますが、観光や短期のお仕事、留学なんかで実際に訪れた経験をお持ちのお方なら誰しもがご実感なさった通り、実のところ『そうでもない』のが現実ですよねー。

：ごく一部の地域を除いて、はね…。

誠に不思議なのですが、ロサンゼルスってところは『道挟んで向こうとコッチ』だけでも、途端に治安が変わったりするのです。

オフィスビルディングが立ち並ぶビジネス街の道路を一本跨いだだけで、イキナリもう危険地帯になっちゃったりしちゃうんですね、不思議なだけどね。

っでね、ワタクシ事（…ってワタクシのエッセイなんだから当然か…）、ロスに移住して2年目を迎えアメリカ生活もヤットコ慣れはじめて『調子に乗ってきた』頃、なんてことの無いマツ昼間にオフィス街のガソリンスタンドに入ったとき…。

最近では日本でも『セルフサービス』のガソリンスタンドが広がりつつあるようですが、ここアメリカでは、それが普通。

現在は『ガソリンポンプ』自体にクレジットカード決済できる機能が装備されているんだけど、当時（1998年）はまだ、一度レジでカードを預けてガソリンを入れ、入れ終わった時点で再びレジに戻って、チャージされた金額の伝票にサインしてからカードを返してもらったという、誠に面倒くさい方法しかなかったのですねえ。

この時は、日本から母親が『生まれて初めてのロス』に来ていて、せっかくだからとドライブ観光している途中、車にガソリンを入れてあげようと、たまたま目に付いたスタンドに入ってレジのお姉ちゃん（横柄な態度だったのよ）に『フルアップ！（満タンって意味ね）』と告げながらクレジットカードを預け、ガソリンをドブドブ入れると、またレジへと向かったのです。（さすが2年も居ると、もうこんな手馴れたもんで、誰でも余裕でスイスイできちゃいます、簡単簡単！）

ショップのドアを開けると、既にお客が3人レジに並んでいます。（コッチのレジは動作がトロくて、簡単なことでもスグに対処できず、いつもアツという間に行列が出来上がっちゃいます）
トロい上に態度が悪いレジのお姉ちゃん2人…。

…余計イライラ…。

…あーイライラ…。

と、イライライライラしているうちに、やっと僕の一人前、黒人の番がやってきました！

『あつと一人っ！あつと一人っ！』

と思っていたと、なんやら、前の黒人お兄ちゃん、ボソボソと聞き取れない言葉を喋っている…案の定、『態度が横柄なレジのお姉ちゃん』が『え？聞こえないよ！ナニ？』と、誠に横柄な態度で黒人お兄ちゃんに聞き返すと、少々ボリウムアップした声で『ギミーマネー』って言うてる…。

そう言ってる黒人お兄ちゃんが自分のオナカに手を突っ込んで引張り出してきたものはあゝ…、

…ピストル…。

…またの名を、拳銃…。

…そのまたの呼び方では、チャカ…。

…そのまたのまたの…そんなことはもうどこでもいいっ！

そーなんです！なんと僕は、『ピストル強盗の後ろに並んでいた』
のでえーす！

ビックリ！！驚いたのナンの！！
なにせ、よりによって『強盗の後ろにズウーッと並んでいた』わけ
ですからね、こんなこと、普通の人じゃあ一生味わえない経験です
ぞコリヤ！…なんてノンキなこと言ってる場合じゃない！

だがしかーし、その直後、僕は誰も想像できないであろう奇天烈な
行動をとったのでえす！

『勇敢にも果敢にその強盗に飛び掛り、しばし格闘した挙句、見事に銃を奪い取った！』

のではなく、

『その強盗と一緒にになって、横柄な態度のレジの姉ちゃんから、見事にお金を奪い取った！』

訳でもない…。

なんと、なぜか反射的に『呆れた顔をしながら、堂々とした態度でゆ〜っくりと歩いて店を出た』のでーす！

当然、黒人ピストル強盗お兄ちゃんの口から『ドンムーブ！（You do not move！動くな）』と。

その声は、立ち去ろうとしている僕の背中越しに聞こえてはいましたが、ピストルを目にした直後に頭をよぎったのが『やべえ〜、お袋が車の中で待ってるんだあ〜』だったので、コトが大袈裟になる前にサッサとこの場から離れちゃった方がいいなと、咄嗟にそんな行動をとってしまったのですねえ〜！

これ、極悪非道不良少年時代だった頃に良く使っていた『ワザ』なんだけど、結局のところ相手の頭ん中もテンパってるから、キヤーキヤー騒いでビクビクすると、かえって相手がパニックになっちゃって何をしでかすか分からない、だからコッチは堂々とした冷静な態度をとると、なぜか相手も落ち着いて動けなくなっちゃうんですな〜、心理作戦ってやつ。

外に出て車に乗りこみ、エンジンをかけて速攻でガソリンスタンドを後にしましたが、すぐに、

『…いけね、クレジットカード預けたままだ…』

と、再びそのガソリンスタンドへ引き返し、念のため車を遠くに停めてシヨップに近づいてみると…、

すでに『黒人ピストル強盗お兄ちゃん』の姿は無く、当然ドアはロックされ、窓越しに見える『横柄な態度だったお姉ちゃん』は口から泡を吹き出しながら電話をしている…。

外からその様子を伺っていると、電話を切ったお姉ちゃん、今度は防犯カメラに向かって何かを大きく書いたものを見せはじめた、と、

そのタイミングで僕が、ロックされているドアを外からドンドンと叩きながら、『カード返してえー！』と。

するとお姉ちゃん、ドアの隙間から僕のクレジットカードを投げてよこした！

僕がそれを拾い上げると、白人の紳士がお一人、ロックされっぱなしのドアを開けようとしていたので、

『今、ホールドアップにあったんだよ』

と伝えてあげると、

『チッ、なんだよまたかよ』

って言いながら、『他まで行くのが面倒くさいなあ』って感じで車に乗り込んで行っちゃった…。

…そんな簡単な…。

まあ、変な意味『慣れっこ』なんでしょうなあ、『ピストル強盗』なんてえ…。

しかし、それにしても撃たれなくてヨカッタですわ自分。

もちろん、実はこんな事件が起きていたってこと、未だ母親は知りません。（…聞いたらヒックリ返っちゃうかも…）

ところで、この事件から十年以上経っても、まだ気に掛かっていることがあるのです…。

…最初は2人居たはずの『横柄な態度だったレジのお姉ちゃん』、僕が戻ったときには1人しか見当たらなかった…。

…もしかして…、キャー！

ミッション・インポッシブル。 其の式

思いっきり話が前後しちゃいましたが、例の『自動車免許取得大作戦』の続きをば。

さてさて、『アプリケーションフォーム（申込書）』を書き上げて再び『DMV』へやってきた龍人君、まず『筆記試験』を受けることとなったのですが、ここアメリカでは問題文が英語だけではないんですねえ。

さすが『ユナイテッドステイズ』、他民族が集まって成り立っている国だけあって、問題文もインターナショナル！もちろん『日本語』も備えてあります。

だがしかし、『日本語』の問題文があったって、道路交通法はアメリカ独自、つまりある程度の勉強は必要なんだけど、イッタイ何を読めば法律を勉強できるのか分らない…。

するとすると、『んゝ』と悩んでいた僕を気に留めてくれたオフィスの同僚が、『これに問題が書いてあるよ』と、日系社会に配布されている電話帳を開いて見せてくれたのですねえ。

『あれれ？問題文そのまま載ってるじゃん…』と、一通り目を通してみると、『へえゝ！日本とは丸つきり違うじゃん！』っていう法律まであって、なかなか面白い。勉強嫌いの僕でも興味の沸く内容で夢中になっちゃう。

結局、全ての問題文と答えを丸暗記した状態で、『筆記試験』へと臨んだのでーす。

『DMV』に来てみると、まず『筆記試験受付窓口』で『日本語テスト用紙』を受け取り、建物の端っこ、壁沿いに備え付けた小さなカウンターで立ったまま行う簡単な『筆記試験コーナー』で回答していきます。

問題は36問、そのうち31問以上が正解の場合、見事合格となります。

三者択一の方法で、問題文に合った正解文にチェックするというものの。

：しかし、ここで問題が：

日系電話帳に記載されていた問題文はなんてことなくスナリと理解が出来たのですが、ここにきて『本チャンの問題文』の日本語がヘンテコで理解できない！

現在オンラインで『無料翻訳サービス』なんかを利用して英文を日本語訳すると、トンチンカンな文章になって、かえって理解に苦しんじやったって経験、皆さんも一度はなさったことがあるとは思いますが、そんなレベルじゃないほど、ヒドイ！

『あなたの車線が2車線ある、たくさんの車が走行する信号が青だったら、緊急車両がきた時点で、ただちに右車線にいくことがあるかもしれない』

という問題文の答えが、

『加速させて安全な処理をする』

『あなたと他の車両との間隔をとる』

『ただちに停車する』

だもん…実はこの中に正解が1つあるらしく、それを見つけないくちやなんないんだけど、それ以前に『問題文自体』がまず理解できない…。

『問題が理解できないんだもん、大問題だぞコリヤ!』なんて考えて微笑んでる場合じゃない!

まさに『第六感(またの名をフォース)』を使って回答していかないければならない、しかも5問しか間違えちゃいけない。

『運転免許筆記試験』というよりも『超能力レベルテスト』みたいな次元で脇に冷たい汗をかきながら回答を終えると、そのまま答案用紙を持って再び受付窓口へ行き、その場で正解合わせをしてもらいます。

受付の白人オバサンがスルスルとチェックしていきます…緊張の間です…手に汗握る龍人くん…。

そうして向かえた結果、なんと2問間違えただけ!見事合格!となったのでえーす!ヤッター!

さてさて、テンポラリー(仮免みたいなもん)の紙切れ免許をもらって、無事『筆記試験』を終えました。

通常、『国際免許とよばれているもの』を持っていない場合、運転暦3年以上の経験者が助手席に乗っていれば、この『テンポラリーライセンス』で運転が可能です。

まずは第一関門突破の龍人君、すぐに『実施テスト』の予約を入れたのでしたあー。

ネイティブイントネーション。

『アメリカかぶれL Aに渡る』の紹介文で、『コーヒーもろくに頼めない』とありますが、『コーヒーくらい頼めるだろう普通!』と思っていらいやる方も多いでしょうー、そりゃあゝ実際は頼めますよ僕だって!

…頼むくらいはね…。

するってーと、一体全体どういうこと? かというですねぇ…

僕が以前の会社を辞めてすぐ、一ヶ月ほど『旅行』としてロサンゼルスに滞在(友人宅に居候)していたことがあったんですが、『せっかくだからサンフランシスコにも行ってみよう!』って突然向かった時のこと。

車で8時間かけてやっと着いたサンフラン、『右も左もわからないから、まず地図だな地図!』ってことで、ガソリンスタンドでセコイ地図を買って、スタンドのお兄ちゃんに『ディジュノウチープレート?』って聞いてみたら、そのお兄ちゃんインド人だった!

だけど凄いナマリ英語で『ふろんとおぶ ごーるでんげーとぶりっぢ』って答えてくれたので、地図みながらゴールデンゲートブリッジに向かっていくと、在るわ在るわ! 『チープそうなモーターたちが!』

アチコチ回って結局『一泊25ドル(!)』っていう部屋をみつけた龍人君、ひとまず落ち着いたところで、さっそくサンフランシスコ市街地をドライブとなりましたねえ。

『うわぁーケーブルカー!』『うわぁーフィッシュヤーズマンズワーフ!』『うわぁーゴールデンゲートブリッジ!』『うわぁーチャイナタウン!』『うわぁーアレ?あと他に何かあったっけ?』

と、腹いっぱいサンフランシスコを堪能している、その夕方、

『ん?んんー!あれってメルス・ドライブインじゃないかぁー?』

メインストリートみたいな太い道路を車で流している僕の目にイキナリ飛び込んできたものは、僕の人生を変えた、いや、僕の人生の基盤をつくっちゃったといっても過言ではない映画『アメリカン・グラフィティ』で、まるで『空母』のような役割として登場している『Mel's Drive in』だったのでーす!

今現在でも立派に運営されているドライブインなのですが、実際には『映画にご登場なされたソノモノ』は別の街だったし、しかももう取り壊されちゃってるから、見付けたお店は『その支店』だったんだけど『モノホン』は『モノホン』。

驚いた僕は、通り過ぎた直後にレンタカーのタイヤを鳴かせながらアクセルターンをきめてUターン!凄いスピードでパーキングスペースに車を停めると、高鳴る鼓動を抑えつつクールに早足で店先まで来たところで深呼吸。ググーっとドアを開けて一旦静かに店内を見渡すと、目に付いたカウンター席に向かい、クールに腰掛けました。

さすがにローラースケートまでは演出されていなかったけど、雰囲気のあるコスチュームでキメた金髪白人ウェイトレスが近寄ってきて『うっじゅーらいく、さむしんぐとうどりんく?』って聞いてき

たので、『アイスコーヒー・プリーズ』ってクールに答えたら、『??』って顔しながら引き返していった…。

クールにキメながらも実は興奮して店内の写真をバッチバチ撮りまくっている、金髪白人ウェイトレスのお姉ちゃんが『ひいあーゆうーごおー』って言いながら『ゴトツ』とグラスと伝票を置いて立ち去ろうとしたので、『ミルク・プリーズ!』と。

僕は甘いものが苦手なのでガムシロップは使わないのですが、ミルクは入れる。

すると金髪白人ウェイトレスお姉ちゃん、またも『??』という顔をしながら、小さなグラスに入った牛乳を持ってきた…。

『あれれ?牛乳じゃんコレ…そーかあ、アメリカじゃミルク入れないんだなあアイスコーヒーにい…ウマイのになあ…』

と思いながら、グラスに牛乳を注いでいると…

…注いでいると…

注いだ先から牛乳が分離していくのです!

『あれ?この牛乳、腐ってんじゃーん!』

ってことで交換してもらおうと思っても、言葉が出てこない…とりあえず臭いを嗅いでみると異臭ではなかった感じなので、よく混ぜて飲むことに…。

僕は基本的に『ストロー』は使わない主義なので、グラスにそのまま口を付け、グツと一気に飲み込んでみると…

するとお…

『キヤー！これ、コーラじゃーん！』

ってことで、なんとなんと、終始クールにキメていた僕は格好つけながらウェイトレス嬢に『アイスコーラ』と頼んだと思ったら続いてそれに牛乳を入れて飲んでいたのでーす！

そりゃ金髪白人ウェイトレスお姉ちゃんも『？？』となるわなあ…。

実は、当時のアメリカには『アイスコーヒー』なるものは殆ど存在しない上、『コーヒー』は『カフェ』と発音するので、『コ』から始まる冷たい飲み物は『コーク』だと勘違いしてたんですなあー！納得できます。

『あー、ゼツタイ笑ってるぜえーあのウェイトレスウー、変な飲み方してる東洋人が来てるってえー』

ロサンゼルスからひとり8時間かけてドライブし辿り着いたサンフランシスコ、まったく思ってもみない偶然で、夢にまでみた憧れの『メルス・ドライブイン』を見付けて感激したのもつかの間、顔からボーボーと巨大な火を出し脇の下にツツーツと冷たい汗が流れているのを感じながら、まったく思ってもみない『牛乳入りコーラ』を生まれて初めて体験してしまったのでした…トホホ。

ね！納得できたでしょ？コーヒーもろくに頼めないのですよ普通は…今でもトラウマとなってしまうって、なかなかコーヒーを頼めません…ちなみに、『コーラ』は、『コーク』と言わなければ分かってもらえませんか、お気をつけて…。

本場の農婆。

ロサンゼルスでの生活が始まって半年くらい経つと、僕は『本当に使える日常の英語』を使えるようになりたい願望と『アメリカかぶれの性質』もあってか、頻繁に『スポーツ・バー』へ独りで通うようになったのでえす。

それはもうロサンゼルスに着たばかりの頃から考えていたことで、仕事でなんかに車を走らせながら『スポーツ・バー』思しき店や看板を目にする度に『やっぱ雰囲気あってカッコイイなあ…』と感激しながら場所をチェックをしておいて、後から必ず一度は顔を出してみようと。

そうすれば、当然、独りでバーに座るんですから、当然、いろいろなお客から声を掛けられるし、当然、声を掛けてきたお客は皆『外人』な訳で、当然、否応なしに『日常で使われている英語のお時間』が始まるといった企みだったので…。

だったのですがあゝ…。

『…あつ、そーいえば俺、根っこから英語が喋れないんだから、いくら相手から話しかけてくれたとしても受け答えができないジャンねえ…』

ってことに気が付きました…。(オソツ！)

でね、まず何から始めたかというとね…、

『スーパーマーケットへ行って、トイレを借りる』

だったのでーす！

こうして『外人慣れ』を第一歩として踏み出せば、必ずしや僕も何時の日か『ペラペェ〜ラペラペェ〜ラ』となっていることだろうぞお〜！おおー！

ってことで、早速『スーパーマーケット・デビュー』です。

向かったのは今は無き『Lucky Store』というスーパー。
ラッキーストア

自動ドアがギギイー（油足りなし）っと開いたところをズンズンと入っていくと、レジには女性店員さんが黙々とお仕事中。

そこへすかさず龍人君、ササアーツと彼女に歩み寄ると一言、

『デューユーハバ、トイレット？』

ヤツタゾやりました！見事レジの白人お姉さんに堂々とそう聞くことができました！

すると彼女、『・・・』。

アレレ？通じてないの？アクセントがオカシイのかなあ…、っと思っ
てもう一度。

『ウェアアイズ、トイレット？』

凄いぞ！今度は違うセンテンスを使つての表現だ！やるなあ俺も！
と浸っていたら、

『おー、ゆーみいーん、れすとるーむ!』

とお答えになった!

そーなんです! なんとワタクシ、『トイレはどこですか?』と聞いていたつもりが、

『あなたは、便器持ってますか?』

という、誠に恐ろしい、変質者アンケート並みの質問をレジの白人お姉さんに聞いていたのです!!

『…よかった…いきなりスポーツ・バーなんか独りで行かなくて…本当に良かった…』。

アメリカで生活していくのにも関わらず『トイレの場所』すら聞けない自分、これから『前途洋洋』だったつもりが、『前途多難』の匂いがプーンと鼻を突いたのです!。

ちなみに、『トイレはどこですか?』は一般的にはストレートに『Where is a Rest room?』と使う人は余りいなくて、『How to get to a Rest room?』とか『Can I use a Rest room?』なんてーのを使ってる人が多いみたいです。

過去にあのスーパーで『Do you have a Toilet?』って聞いた人は、後にも先にも、多分僕だけでしょー! (って、あーはずかし…)

ノーと言えないニッポン人。

毎日のようにスーパーへ買い物に行くようになった僕は、次第に『外人慣れ』が始まって、ズウズウしくも自分から色々と店員さんに要求するようになってきた頃、どーしても『日本時代のクセ』がつい出てしまい相手を混乱させてしまう『言葉』があるのに気が付いたのです。

その言葉とは、『No』。

こりゃイッタイどーいうことか？というとお、

たとえば、レジのお姉さんに『袋はいらないよ』と僕が言ったとしやしよう。

すると、レジのお姉さんが『いらないの？袋』と聞き返す。

これからが問題。

日本だと通常、『はい、いりません』となる。

しかし、英会話の世界では、『いいえ、いりません』と答えるのが正解なんですよねー！

ということはある？『I don't need bag』ってレジのお姉さんに言うのと、『You don't need bag？』って聞き返されたら、『No』と答えなきゃなんない。

って、頭では分かっちゃいるけど、つい『Yes！』って答えちゃって、レジのお姉さんから『要るの？要らないの？』って、

ムツとされることが度々あるんですよねえ！

『要らないの？』に対して『No』だと、『要らない、くはない』になると思うんだけど、英語の世界じゃ通用しないから、もどかしさを覚えながらも『No』には『No』と返すのです。

んー、違和感があるなあ…とっているから、未だに『要らないの？』の問いかけに『Yes！』と爽やかに答えてしまうニッポン人なのでした…。

カルチャーギャップ。

皆さんもご存知の通り、英語の国アメリカでは互いの立場や年齢に問わず、まったくもって何のタメライもなく『タメ口』で話します。

これは文法の違いで、例えば日本語で『私は貴方とお話したい』って言葉を英語の順に単語を並べ変えると『私、したい、お話、と、貴方』ってな具合になっちゃうから、語尾がタメ口になるのは当然のことなのですが、会話では無いにしても、『これはこれは、どうもこんにちは、お元気でいらっしますかあ？』って挨拶でも、

『ハイ！ハウアーユー？』が基本。

余程のことがないかぎり、たとえ相手が年上であろーが命の恩人であろーが先生であろーが体育会系の先輩であろーが社長であろーが借金してる相手であろーが、軍隊でない限り、最初は『ハイ！』からがほとんど。

もちろん、お互いに頭を下げて挨拶するなんてーことは、どうヒツクリ返っても有り得ません。

そのかわり、お互いに『胸を張って握手』なんですなあーアメリカって。

んじゃ、手の届かない距離に相手がいるときの挨拶は？というところ、
『ヒョイとアゴを上げて会釈する』んです。

逆なんですよねえー日本のソレとはあ。『下げる』んじゃなくて、
『上げる』。

これどんなシチュエーションでも一緒に、たとえばスーパーのレジや銀行、郵便局なんかも、お客さんに対して頭を下げるのではなく、

『サンキュー』って言いながら『アゴを上げ気味』にする。
なかには『サンキュー』すら言わない……。 (これ、日本人の僕には
未だに少々ムカつかせる態度なのです)

社員教育の徹底されていない『その辺のスーパー』なんかは、サッ
カー (商品を袋に詰める人。日本のスーパーと違って、レジを通し
た後にお客が自ら袋詰めはしません) 担当のヤツとペチャクチャ喋
りながら、お客の顔も見ずにオツリを渡すレジの店員も居るし、挙
句に、ガムを噛みながら『これウマイの?』なんてお客に聞きなが
ら、商品をボンボンと投げて扱うヤツも居るほどなのです!

スーパーに限らず、『ウェルマート』のような庶民的なお店から少
々お高いブティックなんかまで、買った商品が損傷していたりサイ
ズが合わなかったりして『交換・返品』なんかで『カスタマーサー
ビス』に行くと、『このイッタイ何が気に入らなかったのよ! チ
ッ!』みたいな『上から目線』的態度で、誠に横柄で不愉快な態度
をお取りになる店員がほとんど! まったく『普通』なことなんです
ねえ。

LAに住み始めたばかりの頃は、イチイチ本気でムカついていたん
ですが、アメリカ生活も慣れはじめてきたある日、近所のスポーツ
バーでビールを飲んでいたら、偶然、良く行くスーパーのレジをし
ていて面識のあったお姉さんが、カウンターで一人だった僕の隣に
座ってきた事があって (二人組だったけど)、いい機会だからと
意を決して尋ねたことができました。

『日本じゃ信じられない行為だよ、お客が怒って「責任者よんでこ
い!」ってなるよ』

カタコトでそう言うと、

『だって、たとえば店員とお客だと言ったって、結局のところ人間ってイーブンじゃないの、お互い』

と。

要は、その場ではタマタマ『買う側』と『売る側』というだけであって、『社会的立場は一緒でしょ？』って解釈なんですよねぇ。

『…確かにそりゃそーだよ。そりゃそーだけれどもおー、店にお客が来てお金を払っていくから貴方たちに給料を払えることが出来るんであってね、だから貴方たちは今こうしてビールを飲むことが出来るんじゃないんかい？…』

一瞬そう考えたのですが、こんなこと話すと口論になっちゃうだろうし、第一、それ以前に『これを丸々英語で話せないじゃん』だから、『ほお〜』という顔をして、黙ってビールを飲んでました。

こういった環境が当然として育ってきたアメリカ人は、日本へ観光や仕事で訪れて接客される度、当然、日本の過剰な『媚びヘツライ』に対して違和感を感じているでしょうし、彼らの目にはコツケイな姿に映っているのかもしれないねー。

ま、アメリカ人の接客態度は『マニュアル通りの態度で、実は腹の中で何を考えているのか分からない』って怪しむ必要が無いから気楽と言っちゃあ気楽なんですよけどね…。

レッツゴーインディペンデンス。

さてさて、アメリカ生活も三ヶ月目を迎えソーシャル・セキュリティーナンバーも取得したところで、居候させてもらっていた例のパロスバーデスハウスから引っ越して独立生活を始めることに。

お部屋探しは、ここアメリカの最もポピュラーな方法として、『車で物件を探し回る作戦』があります。

これ、日本とは違い、『町の不動産屋に提示されている張り紙を見て、気になる物件があったら中で不動産屋の親父に実際に聞いて、大家に電話してもらい連れて行ってもらおう』っていうシステムが無いのですねえ。

って、その代わりにどうなってるかというところ、

『アパートに【For Rent】の看板が表示されていたら、そのマネージャーに直接問い合わせる』なのです、実に簡単シンプル。

でもって龍人くん、仕事帰りに早速物件探しで『人生で一度は住んでみたいよー!』と思っていた『シティ・オブ・レドンド・ビーチ』へ。

このシティ（おっ、思わず英語だ）、実はね、世界的に超有名なアメリカ60年代を代表するバンド『ビーチボーイズ』の、世界的に超有名なアメリカ60年代に大流行した曲『サーフィンU・S・A』の歌詞中にご登場なさる町なのですよー！（よおーく聞いていると、♪レドンドビーチL Aエー♪って出てきますぞお）

このレドンドビーチ、実は『ノース・レドンド』と『サウス・レド

ンド』があつて、同じ『俺、レドンドビーチに住んでるんだよね』
と言つたとしても『ノース』と『サウス』じゃあ大違いなんですよ
アナタ。

『ノース』は、いわゆる『ビーチ』ではなくて普通の町、しかも少
々治安が悪うござる。

方や『サウス』は、ホント『♪レドンドビーチLAエ〜♪』つっ
くらい、カリフォルニアカリフォルニアした、ウツディーなステ
ーションワゴンにサーフボードを突っ込んで走ってる光景がごく普通
に展開されているサーフシティーなんざんすよー！

もちろん龍人くんは『サウス』へと。

ワァーっとオーシャンに向かってアパートが連なっている、しかも
その殆どが『賃貸』。

『For Rent』サインが目につく目につく！もう『電話かけ
まくりだぞー！』って意気込み充分！

『あれ？だけど俺、英語しゃべれないじゃん…なんて聞くのこうい
うとき…』っていう事実が判明！

だがしかーし！『やるときゃやるぜ龍人くん』、ここは百戦錬磨、
度胸一発、気になったアパートの前から携帯電話で早速電話を。

『はろー？』とマネージャーらしき人物。

すると龍人くん、もう百戦錬磨の風格を見せつけながら一言！

『あー、アイ、アイ ウォント ア ルーム…』

すごいぞ！やった！ちゃんと言えたぞ俺ったら！さすが百戦錬磨！
このこのお〜！

と感動していたのもつかの間、

『のー、でいするーむ、いず、じゃすと、ふおーれんと、そーりー』
ときたもんだ。

あれれ？そのことを言っていたつもりだっつーに俺…。

と思ってよく考えてみたら、『俺、部屋を買いたい』と言ってる
ようなもんだったということが分かって、顔から火を出しながらも、
まるで残念がるように、『オッ、オッケーサンキュー』と電話を切
り、猛ダッシュでその日は帰宅したわけです、ハイ。

レッツゴーインディペンデンス。 其の弐

やっと部屋探しを始めたっていう矢先にポツキリと出鼻をくじかれた龍人くん、翌日オフィスの同僚に聞きましたねえ、『あのさあ、「部屋を探してて興味があるから詳細を教えてください」って、何て言うのお英語でえ』と。

するとすると、日系二世アメリカ人くん、『あいむ るっきんぐ ふおー わんべつと おわ すてゅーでいお』だって。（『ステューディオ』とはアメリカ発音なんだけど、普段我々が口になっているところの『スタジオ』のことで、いわゆる『ワンルーム』のことです）

『これだけで、相手が家賃から何から全部説明してくれるよ』と日系二世アメリカ人同僚くんに言われて『あ、なるほどねえ、難しいことヌカしてないで、そのままシンプルに聞けばいいのねえ！』と納得。

さてその日の夕方、仕事帰りにまたまた『サウス・レドンド・ビーチ』へ。

前日に気になっていた『For Rent』サインを掲げるアパートの前で再び電話を。

『はろー？』と電話の向こうでまた同じマネージャーらしき声。

『ハロー、アイム ルッキング フォー ワンベッドルーム オア ステューディオ！』

やったー！すごい！もうスーラスラ！

なぜならば、仕事かずつと独り言のように、またはお経のように『
アイム ルッキング フォー…』と練習していたからなのでーす！

するとマネージャー、『うい はびん あべいらぼー わんべつる
ーむ ないす びゅー ひゅーち くろーぜつと… ペらぺーらペ
らぺーら（ここから分らなかった）、とぅーたうずん とぅりー
はんでゅれつど ばー まんす』と。

『ん？…最後になんつったあ今あ？ ツーサウザン スリーハンドレ
ッド？ 2300ドル？？…毎月？？…えー！月2300ドルウー
！やべ、高すぎ…』

そりゃあそーです！フルオーシャンビューでホノルルのホテルのよ
うなコンドミニウムだったんですもん、その物件ったら。

『サンキュー、サンキュー、バイバイ』

速攻で電話を切って、仕切りなおし。

それからランクを落としながらイッタイ何軒に電話をしたでしょう
か…そのたび家賃の高さに打ちひしがれ叩きのめされて現実の厳
しさを身に染み込むだけ染み込ませながら『海沿いは不可能』との
結論を出し、車を運転はしているものの『トボトボ』という言葉が
ピッタリな風情で帰路に向かおうとしたその時、通りすがりに『F
or Rent』のサインを見つけて『ダメもと』でまた電話をし
てみたところ、『ふゅーち すてゅーでいお！せべん ふいふてい
ー あ まんす！』と！

これ、どういう意味かと言うと、『ヒューチ』って本場アメリカで

は良く使えますが、『すごい!』の大袈裟版とっていただければ分かりやすいかと。

って言うことは、『スングだだっ広いワンルームが空いていて、月750ドルでっせー!』というご返答をいただいた訳なのでーす!

『え? な、ナナヒャクゴジュウドル? これだったらいいかもー!』

けっして『海沿い』ではないけれど、ツীবロック(約徒歩二分)でビーチだし、おしゃれなおしゃれな商店街もすぐだし申し分なし! っで早速見せて貰いましたよ、『ヒューチ ステューディオ』を!

アパートのエントランスでマネージャーと待ち合わせしていると、ご登場なさったのは『白人の大きなオバサン』。

この大きなオバサンがマネージャーだったんだけど、やっぱりココはアメリカ、目がブルーで金髪、若い頃は『奥様は魔女』の主役だった『サマンサ』に似てたんだろうなあっていう雰囲気を持っているなさる。

けっしてムームーみたいなガバガバワンピースに健康サンダルで頭に網つけたまま咄えタバコなんてスタイルで登場はしません。

『ないす てゅー みいーちゅー』なんて挨拶をかわしながらエレベーターに乗って、目的の『ヒューチ ステューディオ』がある二階フロアーへ。

221号室の前で鍵を出しドアを開けた『若い頃はサマンサ似マネージャー』にエスコートされた僕がそこで見たものはあー!

っーことで、続きは次回…。(お! 連続シリーズだぞこりゃ!)

レッツゴーインディペンデンス。 其の参

さて、『その昔は「奥様は魔女」のサマンサ似だったんだろーなあ…』のデッカイおばさんマネージャーにご紹介いただいた『ひゅーち すてゅーでいお』の中に入ってみるとお、

『うひゃー、ひれえー！（うわー、ひろーい！）、まさしくヒューチだこりゃ！』

そこはなんとなんと、まるで体育館、畳にして5〜60畳はあるんじゃないかってくらい！

いわゆる日本でいうとこの『ワンルーム』といってもカウンタートキツチンはデッカイし『デッシュウオッシャー』や『オーブン』もちゃんと装着されていて、収納スペースも余るくらいアチコチにある。

しかも、ただドアが付いていないっていうだけで、『ここからベツドールームよ』って感じにチャント区分けされたレイアウト、クローゼントも壁一面にデーンと備わってる。

その昔70年代に『Vegas』っていう『Tバードを乗り回す私立探偵』アメリカテレビドラマが日曜夜深夜に放映されていたんだけど、その主人公の部屋が『だだっ広いワンルーム』みたいな感じで、当時、小学生だった僕なりに『かっこいいなあ〜！アメリカの部屋ってえ！』と憧れていたことがあったのですが、この部屋がまさにそれ！

せっかくのアメリカ生活なんだから、これくらい馬鹿げた広さくらいはないとな！ってことで、『決める決める！これに決めちゃうも

ーん!』と思いながら、『これで750ドルだっていうのに、なんで今まで借り手がいなかったんだろ??もしかしてユーレー(幽霊)でも出るんじゃないだろうか?』と、少々嫌な予感を抱きつつ、『あ、そーだ、この大きな窓から見える景色はどんなんだろ?』と、今まで閉められていたままだったカーテンをズズウーっと開けてみると…。

…開けてみるとお…

壁。

そーなんです!自分よにも遥かに大きなサッシに映ったものは向かえの『壁』だけだったのでーす!

『ありやりやあ?海の近くなのに、景色がまったく無いじゃん…』

どころか、陽が当たらない…暗い…。

このお部屋、改めて外から見みると、アパート(といっても一見コンドミニウムっぽい)の大きなエントランスすぐ上の『余ったスペースに無理やりつくった』ってくらい不自然なポジションに位置していて『元々は倉庫だったんじゃないか?』って感じがプンプン。

まあ、思いつき窓に頭をくっ付けて真横を見れば、エントランス前のパーキングぐらいはなんとか見えるし、普段は日中部屋に居ないから暗くてもいいっか、ってことで、結局、『環境』よりも『馬鹿げた部屋のだっ広さ』が勝利して、この部屋で契約をすることになったのでした。

夢にまで見た『アメリカ・カリフォルニア生活』、そこで始めて借

りた『自分の城』は、夢にまで見た『♪レドンド・ビーチL A エ』
『♪』というビーチシティのど真ん中ではあったものの、なんと『オ
ーシャン・ビュー』ならぬ、『壁ビュー』だったのです…。

レッツゴーインディペンデンス。 其の四

さて、スッタモンダの挙句、あっさり『壁ビュー』の『ひゅーち・すてゅーでいお』をお借りすることに決定した龍人くん、さっそくマネージャーの大きなオバサンに『ここに決めます!』という英語がわからず、シンプルに『オッケー!』と。

するとオバサン、『ん?何がオッケーなの?』って感じで、『ゆー、しんかばうてっど』と返してきた。

要するにこれって『You think about it. ご検討ください』ってご返事なわけで、我々日本人の風習からしてみると、『あら?俺って、このオバサンに気に入られなかったわけ?』って解釈をしてしまう訳で、焦った僕は、『ユー dont ライク ミー?』と、まことにド真ん中の直球で(というか、これしか言葉を知らなかったもんで)オバサンに聞いてみると、『のーのー! ゆーどんと らいく でいす るーむ るつくす らいく』って言われて、『…なるほど、オバサン、俺が、オッケーも面白いよサヨナラって勘違いしたんだな…』と判明。

『アイ ウォント リビング ヒアー』と言い直してみたら、『おー!おーけーおーけー!あいむ こんひゅーずど!』ってことで、『んじゃあ、ペーパーワークしましょう!』となりました。

『ペーパーワーク』とは、いわゆる『仮契約書の作成』。

なぜ『仮契約』かというと、契約前に、必ず借りる人の『クレジット・ヒストリー調査』をするから。

これはなにかというと、要するに『今までのクレジットカード返済

履歴を専門会社に依頼して、支払いに信頼性のある人なのかを調べる』のですねー。

って、これで『合格』となると、晴れて『本契約』となります。

仮契約書は『合格』となった時点で、そのままスライドして『本契約書』になりますから面倒はありません。

現住所と名前、ソーシャルセキュリティナンバーと、何か起きたときのために『友人』でも『親』でも『会社の上司』でも、とにかく『アメリカ国内に在住の人』であれば誰でも良いので、その電話番号を記入し、そして、『クレジットヒストリー依頼費用』の20ドルを支払って仮契約は終わりです。

って、待つこと二日後、マネージャーのオバサンから電話が入り、『本契約するから来てくれ』と！

喜んで行ってみると、『アナタのクレジットヒストリーが無い。多分、日本から来たばかりでクレジットカードが無いからでしょう』と言われて『そーいやあその通りだわ、俺、アメリカのクレジットカードなんて持ってないもん…』と考えていたら、『まあ、とにかくアナタを信じるから、真面目に家賃払ってよ！』みたいなこと言われて、『オフコース！』って答えたら、『こんぐらっちゅれーしよん！』って思いっきりハグされました。（笑）

さて、そしてやっと本契約。

アメリカでは、日本みたいに『敷金二ヶ月、礼金二ヶ月、前家賃一ヶ月、ナントカ金一ヶ月…』って何だかわかんない費用は一切かかりません。

『デポジット』として一か月分か、またはそれ以下の金額のみ。

しかも、部屋を出るときに余程の荒らし方をしない限りは、全額返金されます。

そしてそして、『最低二年は住んでもらわないと…』というのもありません。

通常は、『レント』か『リース』の二通りに分かれ、『レント』の場合は『マンス トウ マンス』という『最初の六ヶ月を越えた時点』から一ヶ月単位で何時でも引越しが可能、『リース』は一年単位での更新となります。

いそれにせよ、日本みたいに『引越し貧乏』には陥らないし、気に入らなければ半年で出られるので、アメリカは『引越し天国』なんですよねー！

さて、デポジットを収め、ついに『自分の城』が決まった龍人くん、ここでやっと本格的な『アメリカ西海岸生活』のスタートしたのでえゝす！！

ミッション・インポッシブル。 其の参

しばらく振りの『自動車免許取得大作戦』となっちゃいましたが、まだ『実施テスト』が残っているのですよねー、まだ。

さて、『其の式』では無事に『筆記試験』をパスした龍人くん、その当日に『実施テスト』の予約を入れた翌月（当時は翌月に受けることが出来ましたが、現在ではナカナカ予約が取れず、テナポラリーライセンスを何度も更新しながら、数ヶ月間待たされるようです）、ついに『手に汗握る』路上試験が…。

とはいっても、もう既にバンバン運転しまくっているし、フリーウェイもビュンビュン走りまくるにいいだけ走りまくっていたから、『余裕余裕』です。

しかしここでひとつ、気になっている事実が判明…。

『あのねえ、黒人の大きなオバサンが試験官でいるんだけど、そのご婦人に当たったら気をつけたほうがいいよぉ…アジア人が嫌いらしくて、点数キビシイってさ』

と、風の噂で耳にしていたのです…。人種の多いアメリカならではの。でもって、その当日。

…その前に話しがチョット脱線しますが、僕はホント不思議に思っている『ここが変だよアメリカ人』のベスト15（中途半端だ）以内に値することがあるのです。

それは、『家の中でも靴を履く文化なのに、外では裸足で歩く』

（こういう人、沢山います。裸足のままスーパーに買い物にきてる、裸足のまま散歩している、などなど…）

と肩を並べる、

『運転免許を取るための試験に、車を運転していく』

なんですね〜！

日本では、『免許をとってから運転』、または『免許をとってから自動車を購入』というように、まず『免許をとってから』が大前提なのですが、こちらアメリカでは『試験場には自分で車を運転して向かう』のです。

んー、完全に『ニワトリが先』ってパターン…。

しかも、日本ではまず、試験の前に何時間もの『実施練習』があって、自動車学校の敷地内でグルグルと運転させられ、『坂道発進』や『縦列駐車』などのスペシャルなテクニックも特訓させられた挙句に、やっと『仮免許』となる。

だけど『仮免許』を持っても、決して普段の時間は公道で運転してはいけない訳で、『公道デビュー』は自動車学校の教官と一緒に、ってーのが当たり前なのだけれど、ここアメリカでは『筆記試験で合格した時点で、いきなり突然車に乗って公道を走っても良い』のですねえ〜！

もちろん、『3年以上の運転免許保持者が同乗する』という決まりはあるのですが、ハタからはそんな区別がつきません。筆記試験だって『ハイドロプレーニング現象』なんてー恐ろしい現象は全く出てこないから、皆知らないし。（だから、たまに雨なんか降るとアチコチで事故ってます）

しかも皆さんご存知、16歳から運転できちゃう。

セレブな家族のドキュメント番組なんかを観ていると、『娘の16歳の誕生日プレゼントに』なーんか言っちゃって、豪華なお誕生パーティー会場にピッカピカのカスタムな高級車『レンジローバー特注モデル』なんかをディーラーの営業マンに持ってこさせて、娘が感激して涙しながら父親に抱きつく、っていう、誠に我が心情穏やかでない内容を目にすることが偶にあるのですが、こういったことがアメリカでは日常茶飯事なんですよねー！

16つつたらアナタ、高校一年生ですよ！高校一年生！オムツが取れたばかりのまだ『鼻っタラシ』が、もう車を偉そうに運転しているわけですよ、アメリカってここは！

…って、ヒトの国つかまえてそこまで怒ること無いですね…だけどいいの、アメリカ好きなんだから…え？文句でもありますの？

話を本題に戻して、『実施試験』当日、予約した用紙を持って受付を済まし、車に乗って順番を待ちます。

『あゝ、噂の黒人オバサンに当たりませんようにいゝ…』と神さま仏さまにお祈りしていると、ついに僕の番が…。

『はろー！』

と運転席の窓に現れたのは、『日系の男性』！

『ふゝ！お祈りが通じたのね』と、神さま仏さまに感謝しながら、僕は『ハロー！』と。

ウィンカーやストップランプ、クラクションやバックランプが正常に働いているかをチェックして、イザ公道へ！

『ねくすと しぐなる、たーん れふと』とか指示されるのですが、ここで大変なのが『レフト』と『ライト』を瞬時に『左と言ったの

か、いや右なのか』の判断しなくちゃならないことなのですねえ。

『運転免許の実施試験』というより『反射神経レベルテスト』みたいな思いをしながら、フリーウェイをチョコッと乗って降りて、一時停止をシッカリとして、黄色になったばかりの信号もシッカリ止まって…さあ、もう帰りますよ、って右折しようとしたとき、遥か彼方にいたはずの車が凄いスピードで近づいてきて、あやうく追突されそうになったのです！

普段はこんなこと無いのに、こういうときに限ってこういうことが起こります。

『…おいおい、なんだよコイツ、たのむよ…』

と思いながら試験場へ戻り、空いている駐車スペースに停車しました。

するとヤッパリ、『んー、危険な運転が一箇所あったねえ…』と教官。

『あー、やっちゃった…落ちたぞ今回…クソ…アイツめえ…』と落胆していると、

『これから気をつけてね！ハイ合格！』とおく！

ヤッター！運転免許獲得ー！ウレシー！カッコイイ『アメリカンドライバーズライセンス』がもらえるんだー！日本の皆に自慢しちゃおー！

と、この瞬間はまるで『飛行機操縦ライセンス』か、果ては『スペーシシャトルの乗組員』に選ばれたかくらいの感激をしたのでしたー！（その後すぐに撮った免許の写真は、蔓延の笑みを浮かべています 笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7907c/>

アメリカかぶれLAに渡る

2011年10月4日02時14分発行